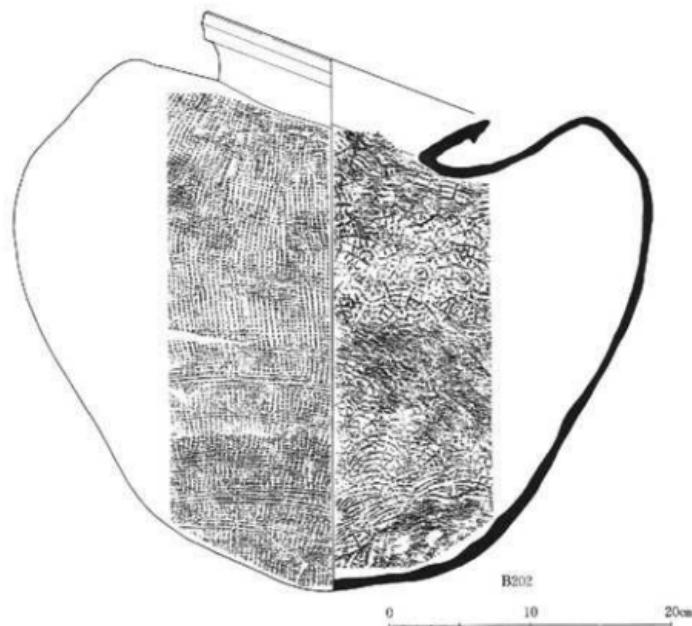


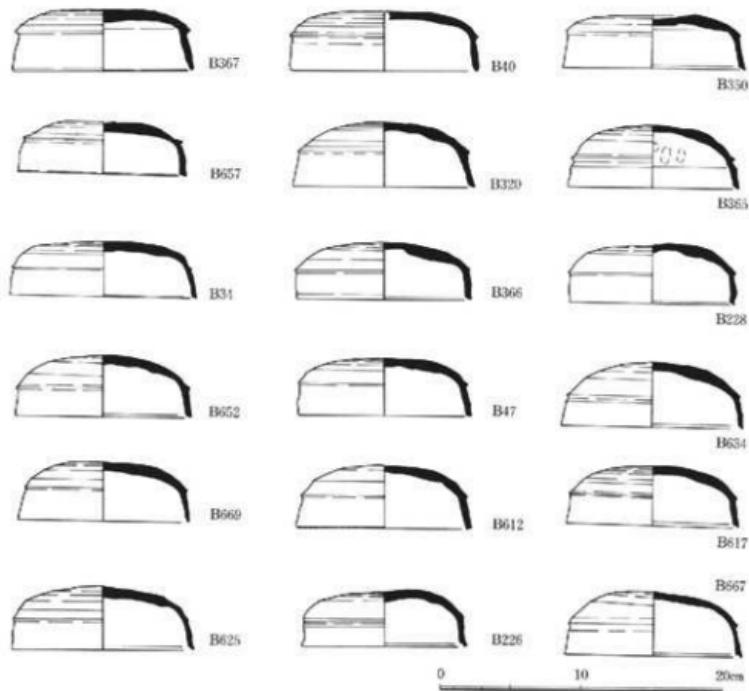
第47図 B・C 56-OR出土遺物



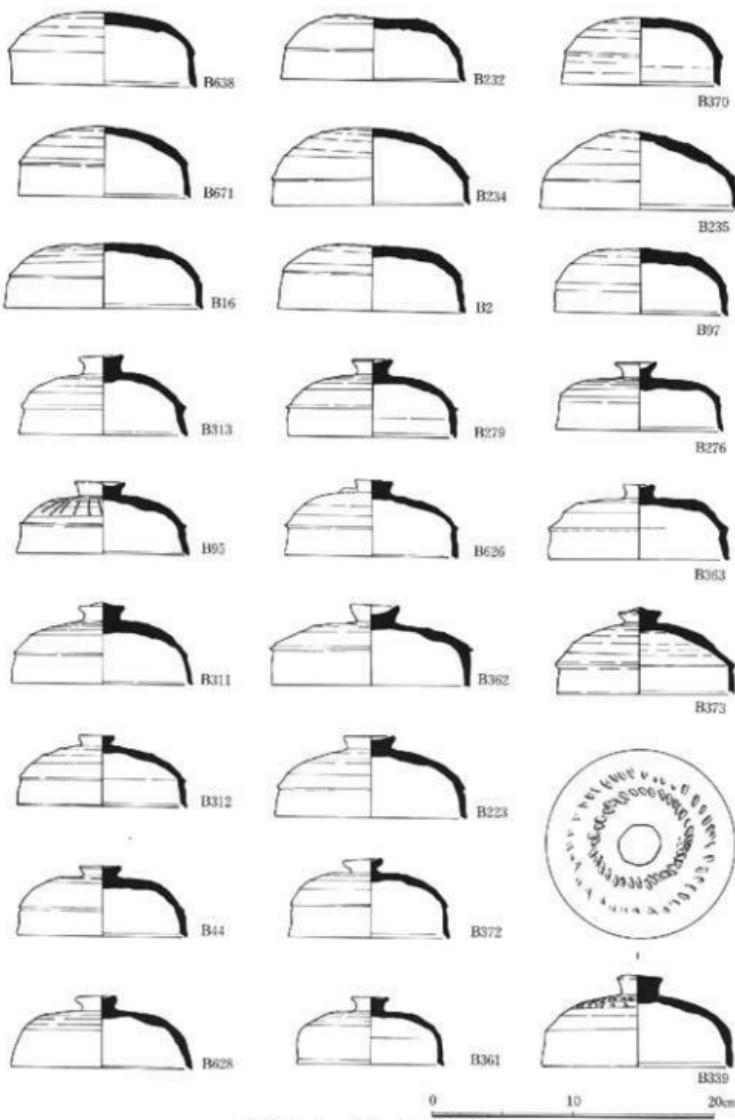
第48図 B・C 56-OR出土遺物

没後は最終的に6世紀後半～末とみられるB1-ORがB-C132-ORの上面を流れる。この河道の埋没後は完全に河道は現在の石津川寄りに流れを変えたとみられる。

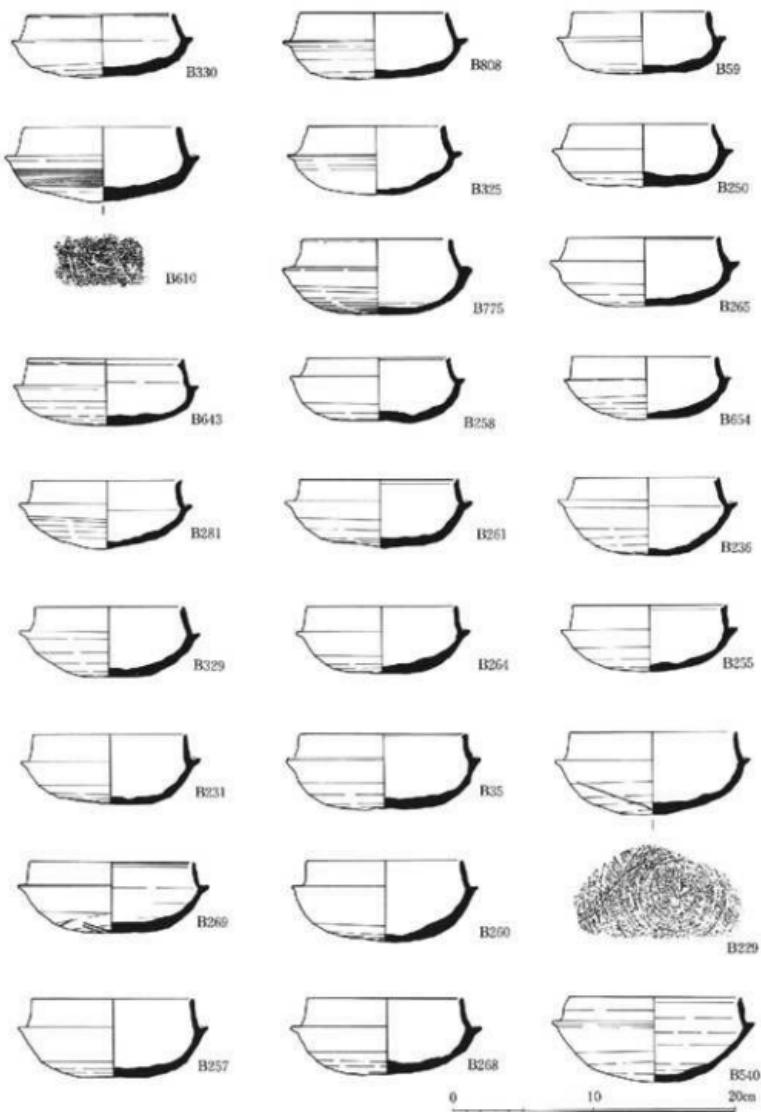
B-C56-ORから出土した遺物は弥生中期～6世紀前半である。流れの中央付近では弥生土器・古式土師器・初期須恵器・韓式系土器が出土し右岸寄りで5世紀末～6世紀前半の須恵器・土師器が出土している。弥生土器中期で生駒西麓産とみられる台付無頬壺の破片等が出土し、後期は甕の破片が多く出土している。古式土師器は複合口縁を有す壺（B759）、台付壺（B572）小型丸底土器（B518）、器台（B763）が出土している。この土器は布留式土器（船橋H-I併行）で捉えられる一群である。これに対して壺（B819）甕（B804・B772・B842・B840・B821）小型丸底土器（B528）は前者より新しい要素を持ち布留式土器の中では船橋O-I、あるいはO-IIに併行する一群といえる。長胴の



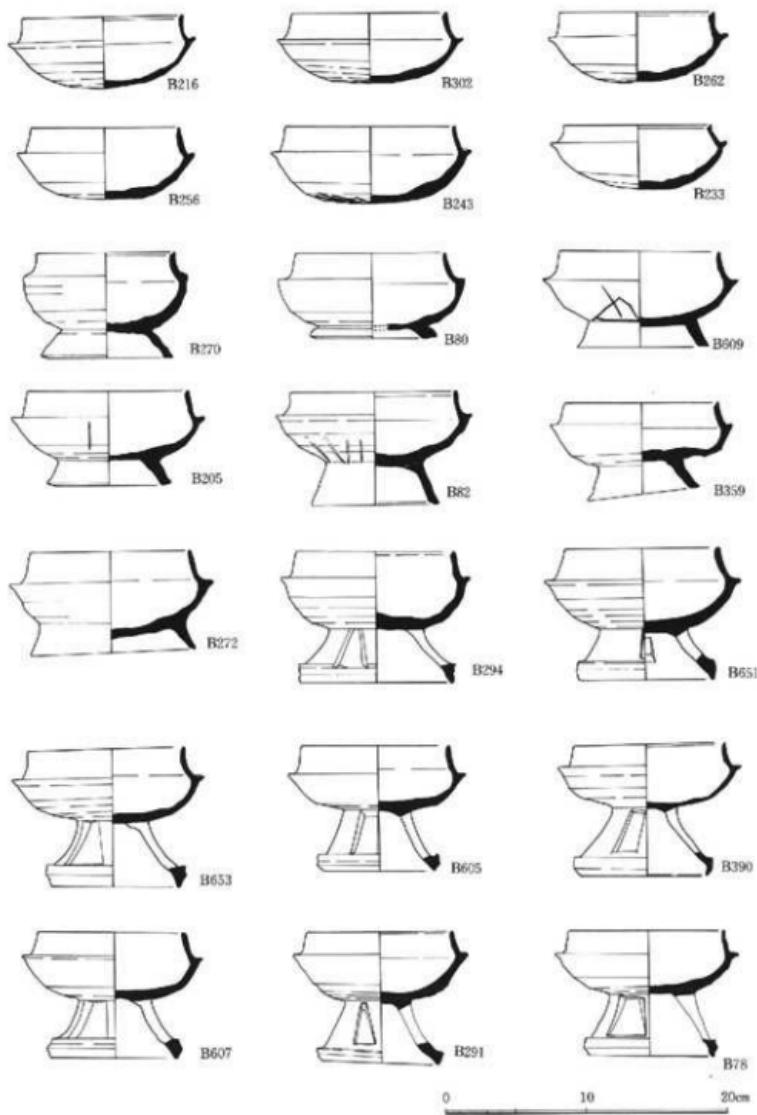
第49図 B-C56-OR出土遺物



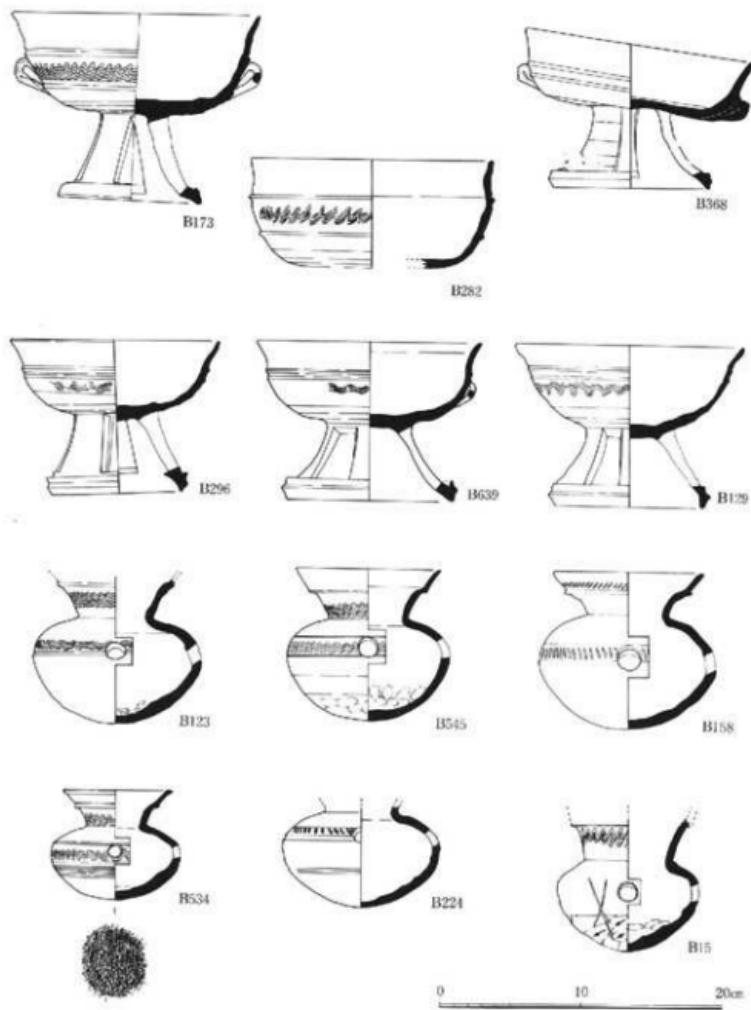
第50図 B・C56-O R出土遺物



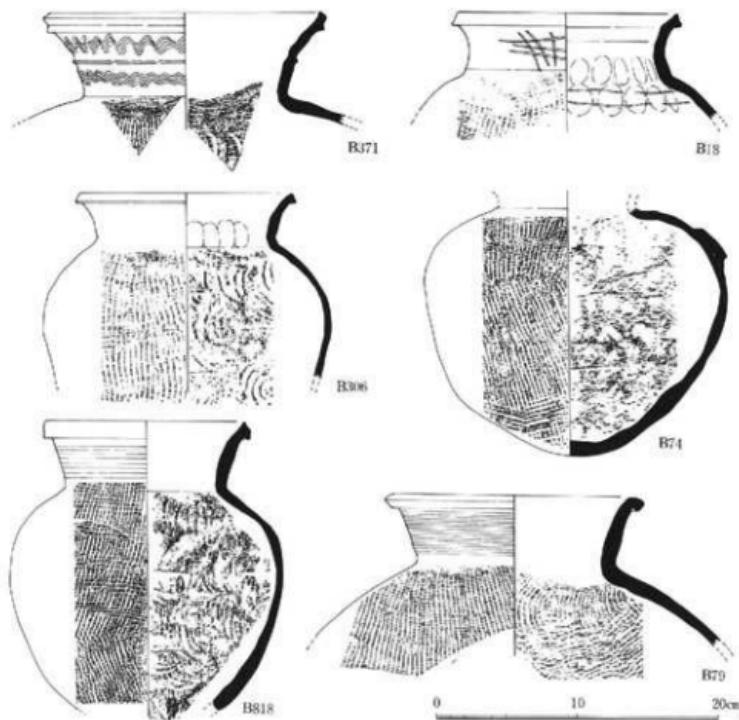
第51図 B+C56-OR出土遺物



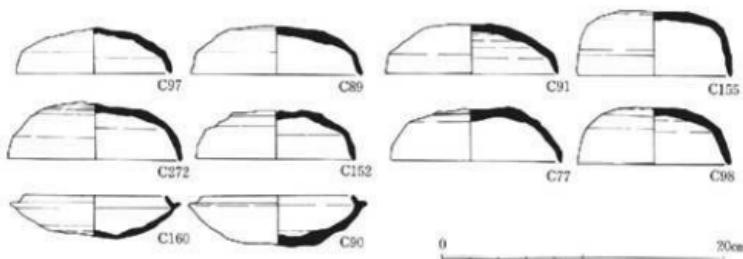
第52図 B・C 56-O R出土遺物



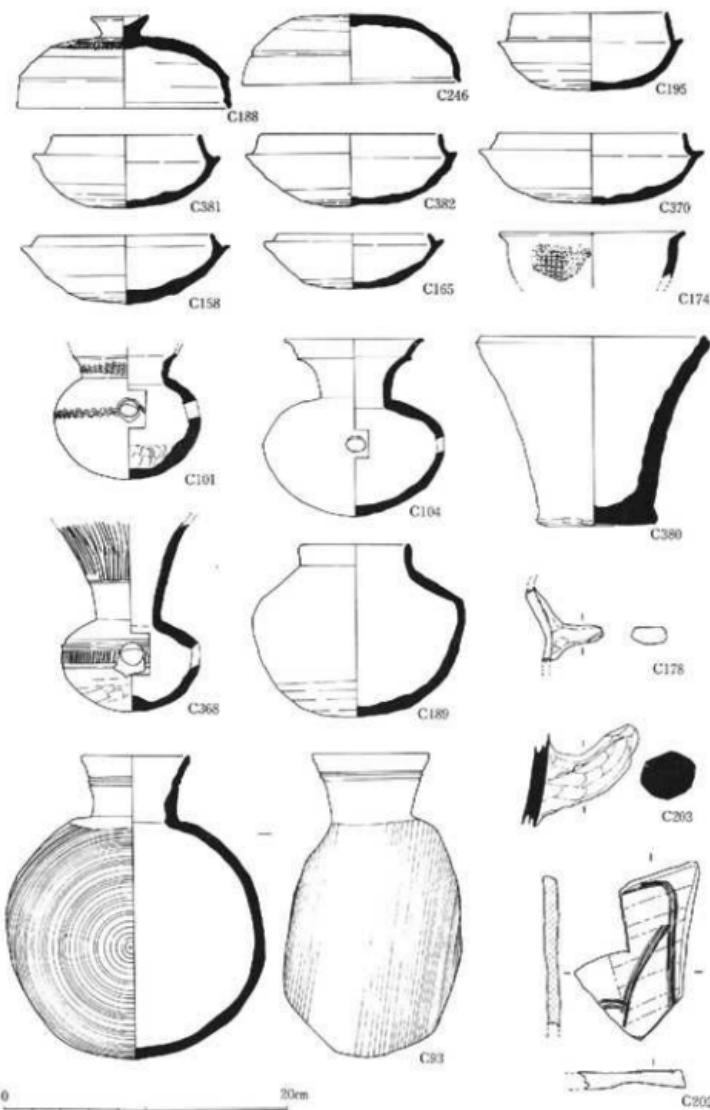
第53図 B+C56-O R出土遺物



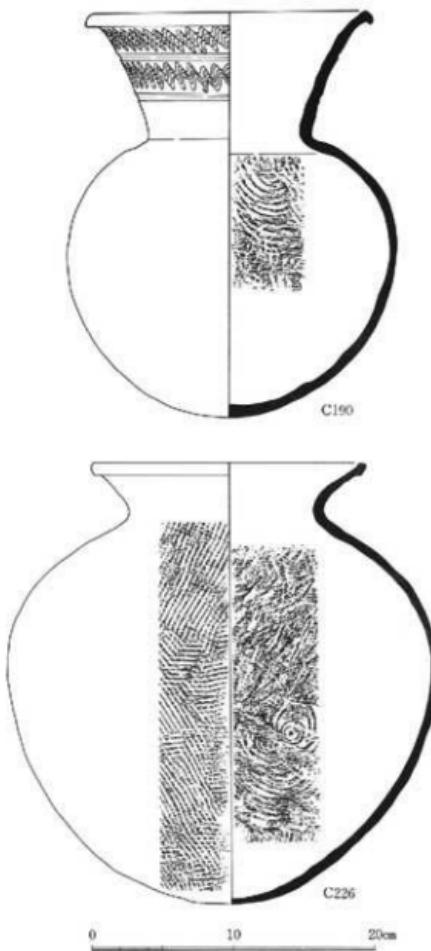
第54図 B+C 56-O R出土遺物



第55図 C 130-O R出土遺物



第56圖 C132-O R出土遺物



第57図 C132-OR出土遺物

6世紀中頃のものに混じって、若干ではあるが6世紀前半の須恵器が認められる。河道の時期としては6世紀中頃と考えている。

遺物は須恵器杯身、蓋、提瓶、壺、壺、瓶、瓦質土器の把手等である。河川の全体からまんべんなく出土した。遺物の量は、杯身と蓋が圧倒的に多い。

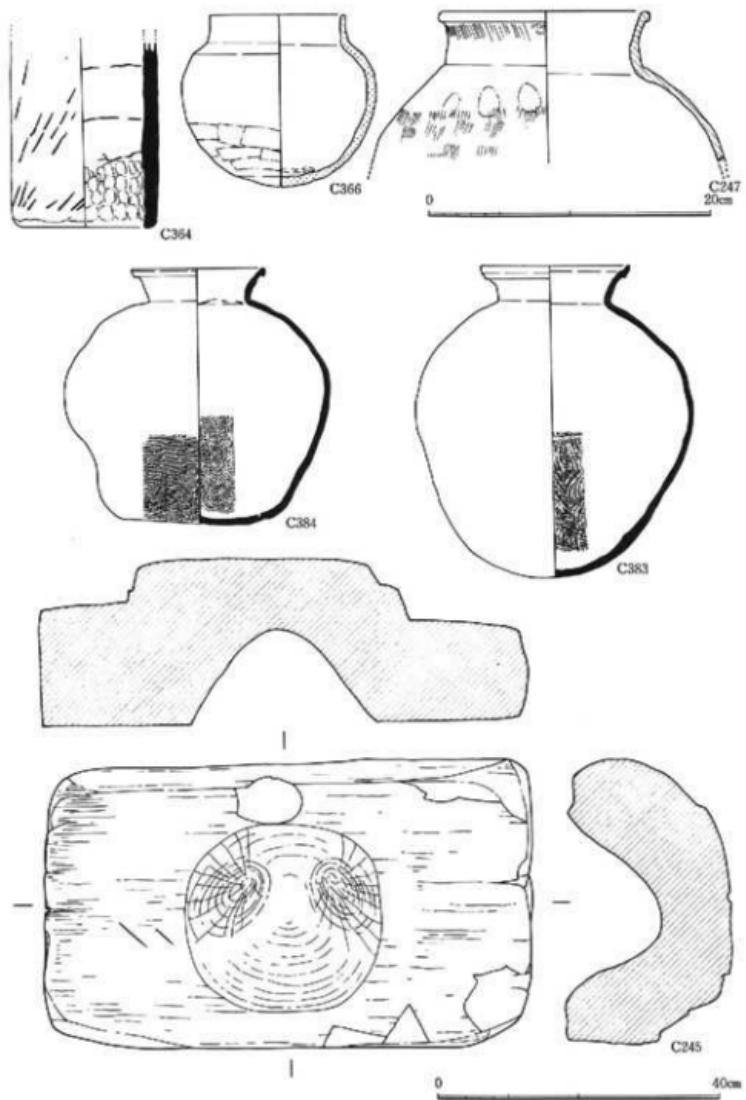
甕（B839・B842）はカマド出現後にみられる形態でさらに新しく位置づけられる。

#### C130-OR (第55図 図版126)

B1-ORの中に含まれる小さな河道である。幅2.3~5.2m、深さ1.1~1.3mを測り、埋土は黄灰色砂疊である。K14UBで須恵器杯身、蓋の10点が横向に折り重なった状態で出土した。

これらの遺物は第55図に示しているが、いずれも口径11.0cm前後を測る小型のものである。これ以外にはほとんど遺物の出土はなかった。

C132-OR (第56・57図 図版127~129) C地区のほぼ中央からB地区西端にかけて検出した河道である。B・C56-ORの中の南端に位置している。C地区的南半部では幅14m、深さ2.6mを測り、南東から北西に向かっていたが、中ほどで向きをやや西に振り、幅も24mと広くなる。粗砂とシルトが複雑に堆積している。断面から2時期に分かれる。出土遺物は



第58図 C683-O R出土遺物

その中で注目されるのは、第56図（C178）に示した瓦質土器の把手である。把手の長さは短く2.8cmである。

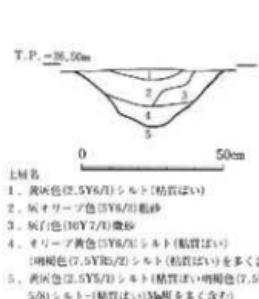
C683-O R（第58図 図版130・131）C132-O Rより古く、B・C56-O Rより新しい河道である。調査区の関係で完掘はしていないので規模は不明である。出土した遺物は、杯身、蓋、壺、異形土器などの須恵器と木製品である。

遺物は多く出土したが、T.P.26m前後、K19B Eを中心に行き5mのところで須恵器がまとまって出土した。また、K19B Dでは、須恵器の壺（C383・384）とともに木製品（C245）が出土した。この木製品は一辺が長さ70.8cm、幅41.2cm、厚さ23.6cmの直方体のうち最も面積の大きい面の一つに、径26.5cm、深さ13.5cmの三角錐状の窓みが彫られているが、用途は不明である。

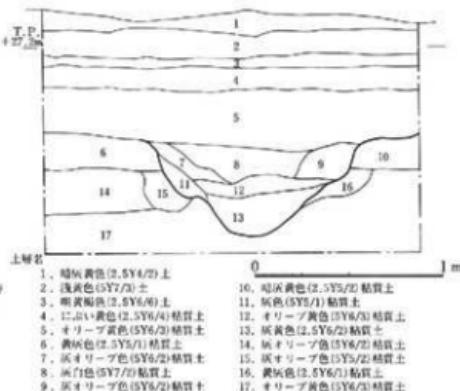
図示した土器はあまり多くない。出土した土器は須恵器の杯身、蓋、壺、壺等が主体である。（C364）の筒状の土器は珍しい器種と言えよう。

#### A 5-O S（第59図 図版21・156）

A 2-O Sに切られる。A51-O Sより分かれる溝である。途中で一時途切れるが、約30mにわたって検出した。南西より北東に流れる。幅0.5m、深さ0.45m測る。埋土は4層に分かれる。断面形状はなだらかに落ち埋土の質から考え多少流れていた可能性がある。出土遺物は須恵器で、5世紀後半であろう有蓋高杯蓋が出土した。蓋（A122）は丸味を帯びた天井部に扁平なつまみをつけ、天井部と口縁部の境界には鋭い稜をもつ。口縁端部

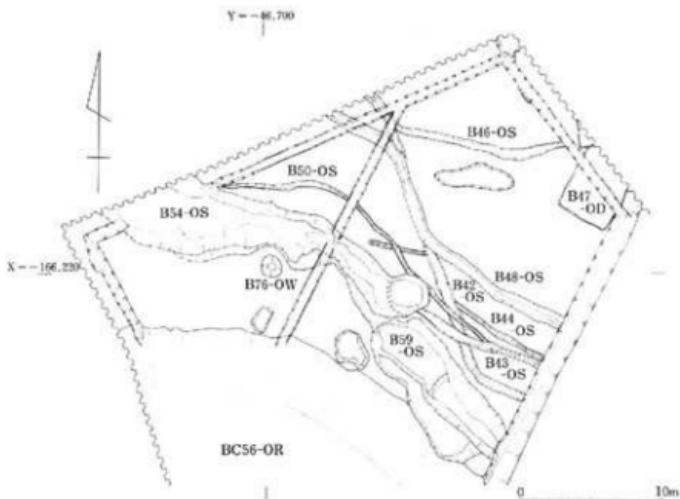


第59図 A 5-O S 土層断面図



第60図 A 51-O S 土層断面図

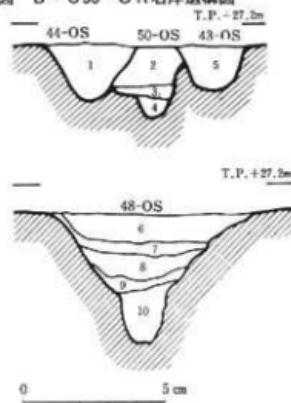
には一条の沈線が巡る。口縁端部には他の杯身と重ねた跡がつき、天井部には自然釉が半分つき杯身と同時に焼成したことが判明する。口径12.0cm、器高4.5cmを測り、色調は灰白色（10Y7/1）である。胎土は砂粒を含み、陶邑古窯跡群で生産された須恵器の胎土の特徴と言える黒色鉱物粒がはいる。



第61図 B・C56-OR右岸遺構図

#### A51-OS (第60図 図版21)

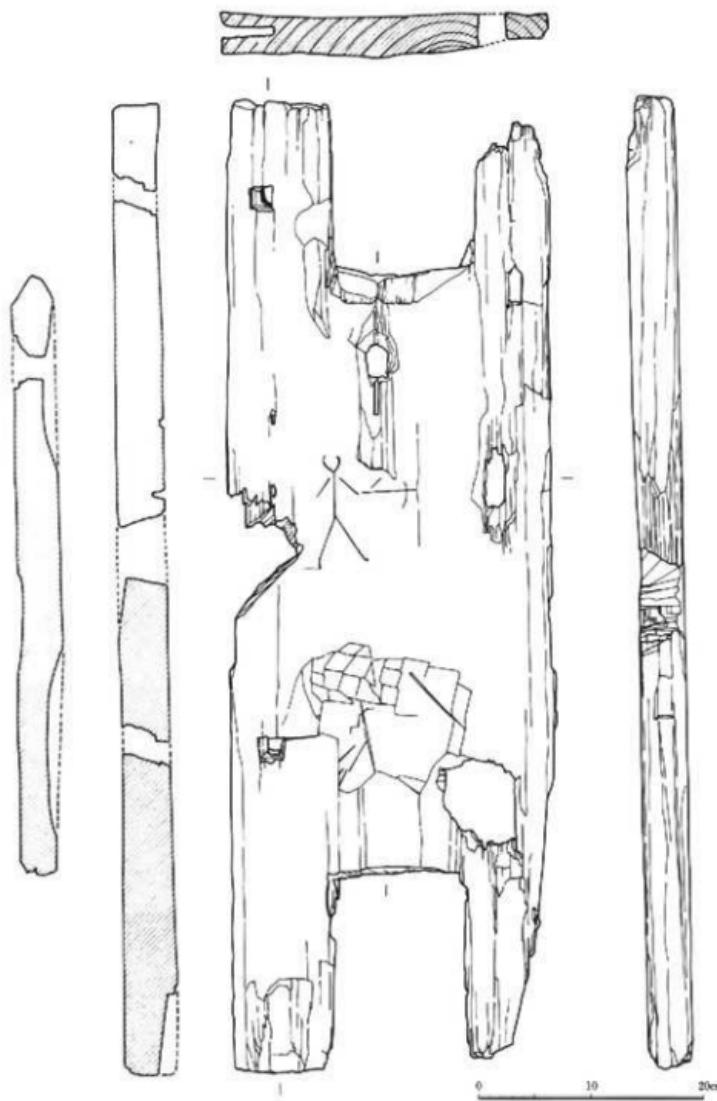
調査区西側で検出した溝で3本に別れて南から北方向に延びる。幅1.26m、深さ0.51mを測る。堆積土は肩から流れ込んだ状況で4層に区分できる。第15・16は、おそらく古墳時代当時に流れていたときの変色、変質であろう。土質は粘質土である。出土遺物は、5世紀後半段階の須恵器杯蓋（A123）が出土し



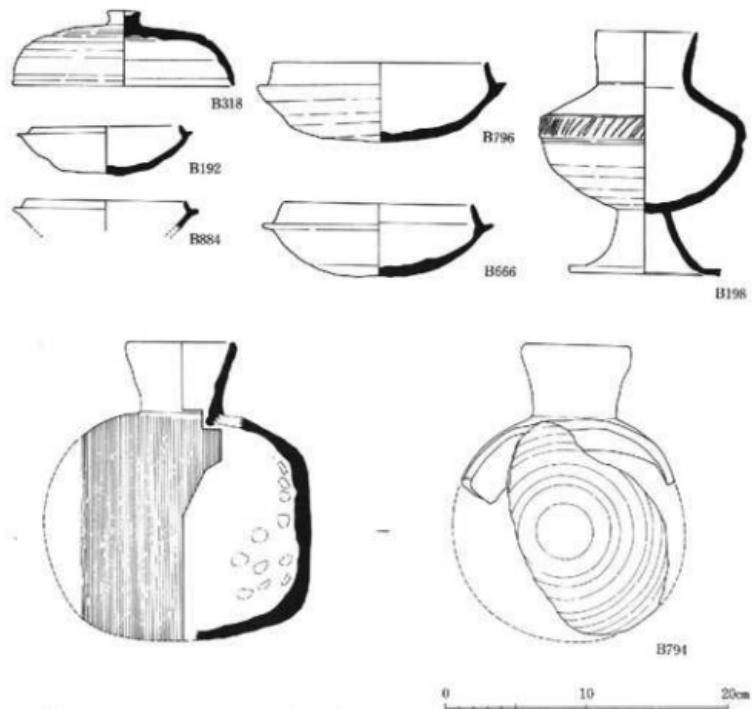
第62図 B43、44、48、50-OS 土層断面図

#### 土層目

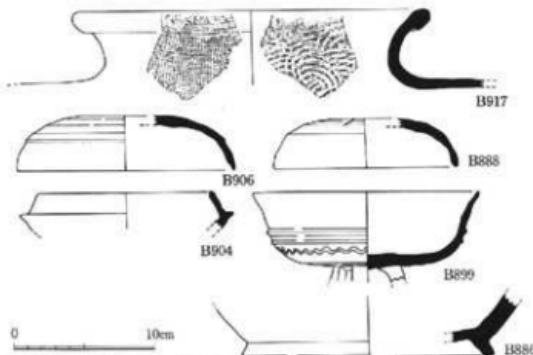
1. 黄褐色(12.5Y6/1) 中  
2. 黄褐色(12.5Y6/2) 粘質土
3. 1-2層 黄褐色(10YR 5/4) 粘質土
4. 黄褐色(10YR 6/1) 中  
粘質土
5. 黄褐色(12.5Y6/2) 粘質土
6. 灰白色(10Y7/1) 剥離・  
剥離・砂層
7. 灰褐色(10YR 6/2) 剥  
離・砂層
8. 灰褐色(10YR 6/1) 剥  
離・砂層
9. 灰褐色(10YR 6/2) 剥  
離・砂層
10. 灰色(12.5Y5/2) 粘質



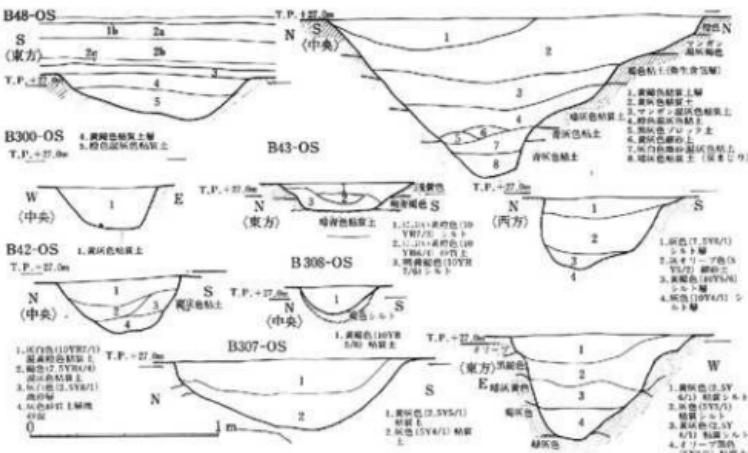
第63図 B54-O S 出土木製品



第64図 B-1区・B43-O S (B796)、45-O S (B852)、48-O S (B666・B884)、  
53-O S (B794)、54-O S (B198)、57-O S (B192・B318) 出土遺物



第65図 B-2区・B43-O S (B904・B906・B917)、B48-O S (B886・B888・B899)  
出土遺物



第66図 B42、43、48、300・307・308-OS 土層断面図

ている。ベースは、黄灰色（2.5Y5/1）粘質土で、その上には水平堆積した5層が見受けられた。

#### 須恵器（A123）

K14EM地区出土、ヘラ削りによる縫が明白である。ロクロは、左まわりで胎土中には黒色鉱物粒を含む。長径12.4cm、短径10.9cmと大きく歪んでいる。内面口縁端部には、顕著な段がある。この杯蓋は単品で焼いたらしく内面を上に向けて焼成したことが自然釉のかかり具合で判明した。色調—灰色N6/

#### B42-OS (第66図 図版38・39)

B1・2区のK14HG～BCで確認した溝である。調査区東から西に延び、弧を描きながらGD付近で大きく蛇行し北に向かって走行している。地形に合わせて東では比較的浅く北では深く傾斜している。溝幅約0.8～0.6m、深さ約0.4～0.3mを測る。北端が調査区外に延びる為、どの様な用途を持つのか不明であるが、一種の排水溝であろう。

また、B43・B50・B301・B46-OSとの前後関係は明らかにしえなかつたが、切り合い関係・方向性から考えて、B300-OSと共に、一群を成すB301・B43-OSより一時期古い溝と考えることができる。遺物は、皆無であった。

#### B43 (303)-OS (第61・65・66図 図版25・38・39)

B54-OSと重複する溝である。新旧関係はB43-OSの方が古い。溝の幅は約50cm、

深さ30cmを測る。埋土は単純一層で灰オリーブ色の粘質細砂混じりである。遺物は4点出土している。杯（B796・B904）は口縁端部は丸く仕上げられ、短く内傾する。壺（B917）は口縁端部が短く立ちあがり端部は丸く肥厚している形状を示す。遺物から判断してII型式2～3段階と考えられる。

B2・3のK14FL～JJでも続きと思われる溝を検出した。B302-OSに一部重複して、南東から北西に向かって走行する。溝の東はA299-OSにつながって調査区外に延びている。溝幅約0.8～0.6m・深さ約0.55～0.2mを測り、断面U字形を呈した比較的しっかりした深い溝である。溝底は北西へ傾斜している。

埋土はベース土の浅黄色土に黄橙色砂質土を基調とするが、溝底に微砂が堆積しており、水の走行の跡を残している。下層には暗灰色粘質土が存在する。

出土遺物は、須恵器蓋杯・壺の破片21片・土師器16片・奈良時代の杯蓋1点を数える。奈良時代土器は混入と考えられ、須恵器では杯身（3）・杯蓋（1）・壺・瓶がある。B906は口径15.3cmを測る杯蓋で天井部にわずかに稜線が残る。中村編年II型式第3～5段階に属すると考えられる。

出土遺物から判断して6世紀後半の溝である。

#### B46-OS（第61図）

幅約0.7m、最も深いところで約10cm、東から西へ流れる溝である。東は削平により消滅している。西は42-OS・48-OSと切り合う。新旧関係では最も古い。図化できる遺物はないが、土師器の細片が出土している。

#### B48-OS（第65・66図 図版26・38・39）

B54-OS・59-OS北側をほぼ平行して南東～北西へ流れる溝である。溝幅は約1.4m、深さは約0.9mで断面はV字形を呈している。埋土は5層に分層できるが砂層と粘質土が互層となっている。蓋杯（B888）、杯身（B666・884）無蓋高杯（B899）、壺底部（B886）がある。壺底部を除くと全て古墳時代の遺物である。B886についてはIII型式2段階以降の遺物とみられる。右岸には奈良時代の遺構が認められないことから、おそらく混入品であろうと考えられる。一応、時期については留保したい。

B2・3区のK14CB～HJでも続きと思われる溝を検出した。溝幅約1.4～0.8m・深さ約0.8～0.4mで、南東から北西に走行する。溝の斜面は深さ0.3mのところで一段屈曲している。溝は深く、底部の幅は狭く、V字溝という感を呈している。西は、調査区外に延び、東はA291-OSにつながりさらに東へ延びていると思われる。

埋土は上層と下層に大別され、下層は有機物を多く含む黒色シルト層であるが、上層は有機物を含まない灰黄褐色土層で、人為的に埋められたことが伺われる。また、下層には微砂が堆積しており、溝の機能時には流水があったと思われる。

なお、遺物は須恵器40数片・土師器片30数片が出土しており、このうち須恵器は蓋杯3点・高杯1点・甕2点などがあり、3点を図示した。杯身は、立ち上がりが短く内傾し、口縁端部を丸くおさめる。甕は口縁端部を肥厚させる。中村編年II型式4段階と考えられる。これらの大半が溝上層から出土しており、6世紀末に埋没したと考えられる。

#### B50-O S (第61・62図)

幅約0.5m、深さ0.2mの溝でB54-O S、59-O Sの北側を平行して走る。遺物は出土していないがB42-O Sより新しくB43-O Sより古い。

#### B54-O S (第61・63図 図版28)

旧河道 (B・C56-O R) 右岸を南東から北西へ流れる溝で幅約1.5~2.5m、深さ約1mの溝である。上流は溝幅は狭く、下流に従って広くなる。埋土は3層に分層が可能で上層・中層は粘質シルトで下層は粗砂である。平面では確認できなかったが溝が2本同方向へ流れている。溝内からは中層から「H」型を呈する板状木製品が出土し、板状木製品の直下からは台付直口壺 (B198) が出土し、さらに横瓶 (B794) も出土している。

木製品は両木口部を「コ」字型に切り込み左右対称としている。側面は一方だけ「V」字型に切り込む。板の表側には観察できる範囲で4ヶ所に孔が穿たれている。側面にも同様の孔が穿たれているが、この孔については規則性は認められない。板の表面のほぼ中央寄りにはヘラによる人物が線刻されている。手に道具を持っているように見えるが不鮮明で確認できなかった。板状木製品は建築部材であろうが用途については不明である。直口蓋から判断して中村編年II型式5~6段階に位置付けられよう。

#### B57-O S (第64図)

B1-O Rから派生した溝で方向は南東~北西へ流れる。溝幅は約1mで、深さも約1mを測る。B1-O Rと同様シルト質粘土層を切り込んでいる。断面は「U」字形を示し、底はやや平らである。埋土は概ね灰白色を呈し、細砂である。

出土遺物はほとんどが須恵器である。溝底に近いレベルから二点完形品が出土しており、この溝の時期を決めることができる。蓋杯 (B318) は比較的に径が大きく直立するつまりを有し、杯身 (B192) は前者に比べ口径は小さい。遺構の切り合い、遺物の時期 (中村編年II型式4段階) からB1-O Rとはほぼ同時期と考えられる。

B59-O S (第61図)

B54-O Sの延長上に見られる溝で規模から見ても本来は一本の溝として捉えた方が妥当と考えられるが、両溝とも厳密にいえば互いに繋がってはいない。図化できる遺物は出土していないが、B54-O Sと同時期と考えられる。

B300-O S (第66図 図版38・39)

B3区のK14F I～B Eで確認した、検出長約13.8mの溝である。B301・B302・B303-O Sなどと一連のものであると考えられる。ほぼ傾斜に沿って掘られたもので、南東から北西に向かって流れる。北はさらに調査区外に延び、南はB301-O Sに連続していたと思われる。溝幅約0.25m～0.3m・深さは約0.2mとB301・B303-O Sに比べると比較的浅い。埋土は黄灰色粘質土からなり、底面には所々微砂が堆積していた。明らかに水の流れが確認できる。

遺物は須恵器・土器器片が散漫に含まれているにすぎない。中村編年I型式末からII型式にかけての杯身3片と甕の破片3片がある。6世紀の溝と考えられる。

B307-O S (第66図 図版38・39)

B1・2区のK14LG～K13DWで検出した南から北に延びる溝である。南へ延びるが遺構保存の関係でそれ以上の掘削は行わなかった。溝は、西に弧をえがきながら蛇行して北流し、K14EB付近でさらに西流する。溝の肩は北へ行くにしたがって広がっており、広いところの幅は約5.5～5mある。斜面に掘られている為、西側・東側ではかなりの段差がある。B1区では、溝底に落込みが見られ、B59・B57-O Sと同一になる。B2区では、溝幅約0.7～0.6m・深さ0.5mを測る。出土遺物は須恵器の細片のみである。

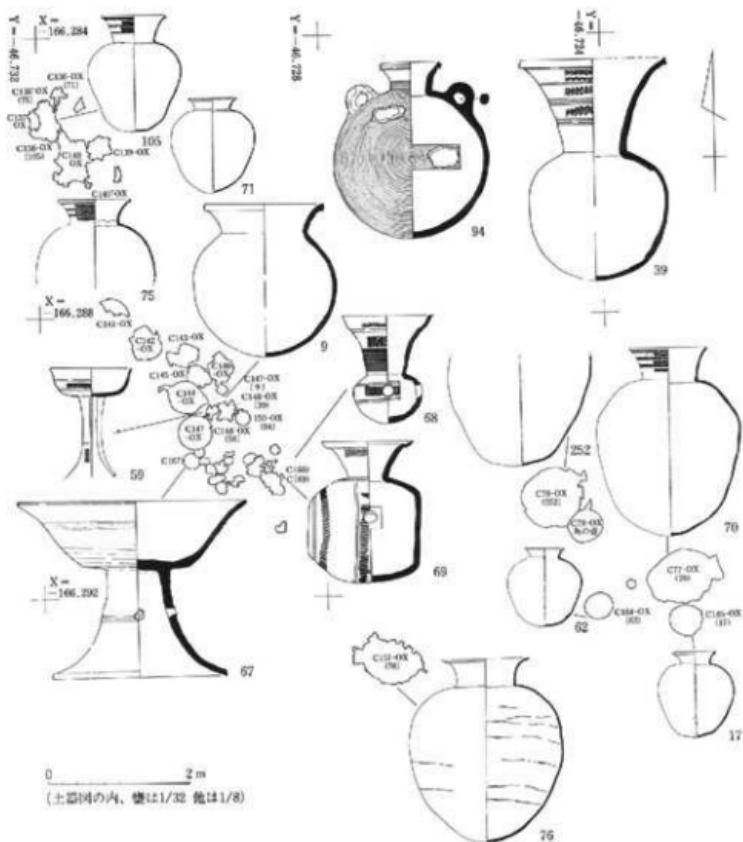
B308-O S (第66図・図版39)

B2・3区のK14IG～J Iで検出したほぼ東西方向に走行する溝で、若干蛇行する。西はB308-O Sに切られており、その先については明確でない。また、東についてもB309-O Sや矢板側溝に切られており、切り合い関係は明確にできなかったが、B43(303)-O Sに取り付いていた可能性がある。溝は検出長約11.5m・幅約0.7～0.5m・深さ0.15mを測り、断面U字形を呈する。

埋土は灰色の粘質土であり、遺物は殆ど出土していない。その為、時期は不明であるが、埋土の状況がB43(303)-O Sの上層に対応することから、両者の溝がセット関係をなして機能していた可能性が考えられる。

C地区 土器群

まず検出した経緯について説明する。中世の遺物包含層の掘削を行っていると、K13W S付近で、須恵器の大型壺2つが上半部を削平された状態で検出された。ひとつは直立した状態で、もうひとつは横倒しの状態であった。このような出土状態であったため、単なる包含層の土器でないかも知れないと考え、とりあえずC77-OX・78-OXと遺構番号をつけて調査を進めるにした。さらに周辺を掘り進めて行くとK13X S付近でもC151-OXとした須恵器大型の壺が正立した状態で確認され、さらにはその北側でも土器



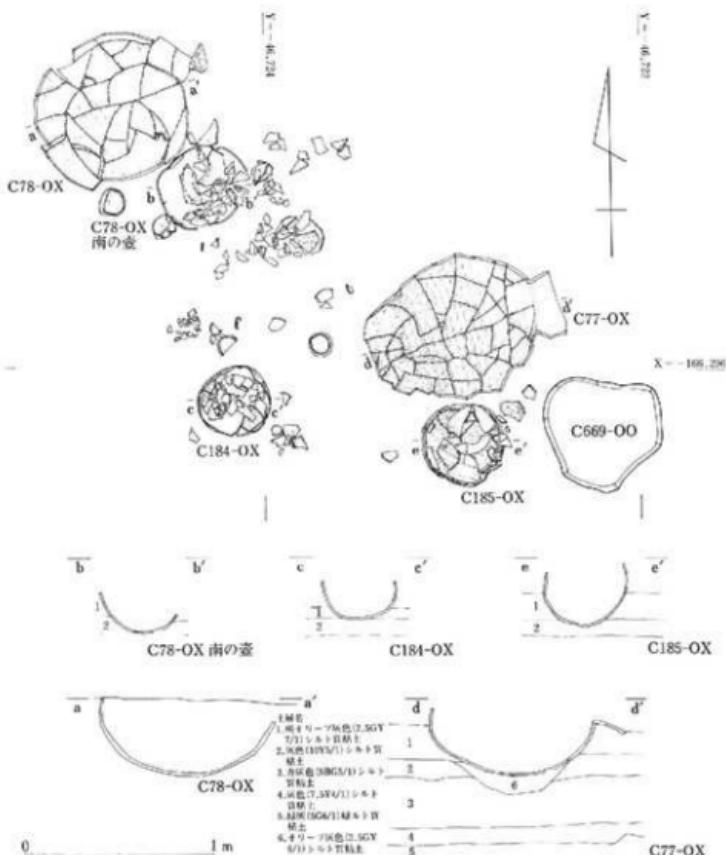
第67図 C地区土器群全体図

が見つかった。

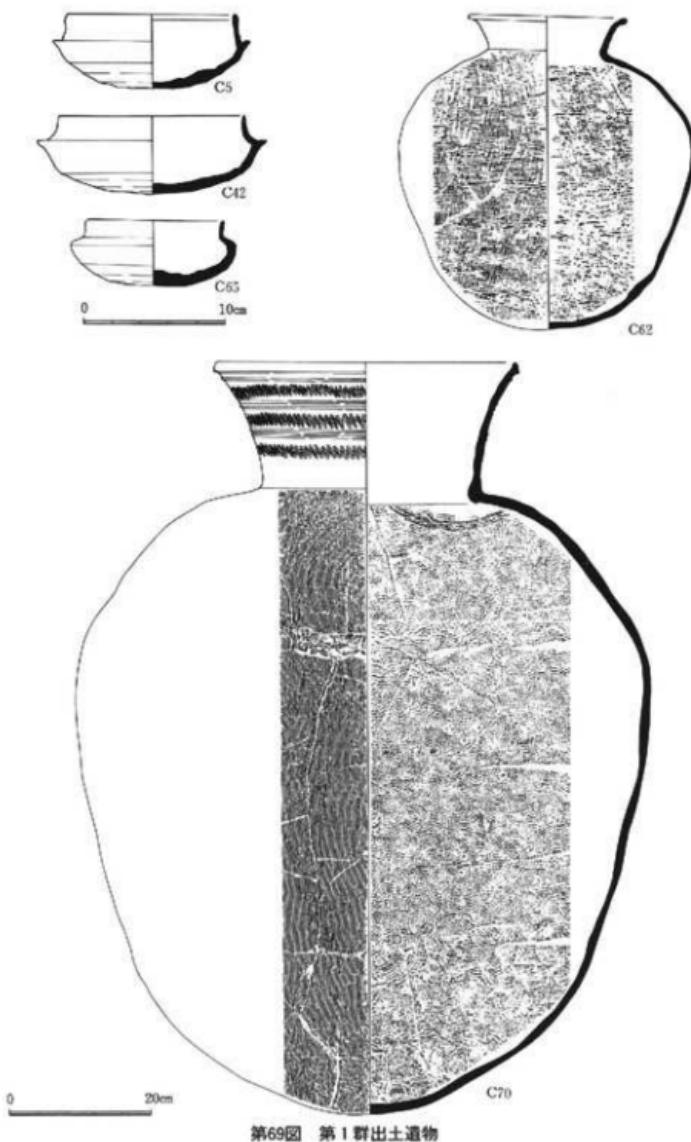
こうして最終的には、4箇所で土器が集中して検出された。今回、これらを土器群と呼ぶことにし、以下4群それぞれに記述を進めていくことにする。

第1群（第68～70図 図版41・42・43）K13W S・WT付近に位置する。須恵器大型甕2個体、中型甕3個体、杯身5個体、短頸甕1個体からなる。

C77-OXは横転した状態で、C78-OXは直立した状態で検出された。ベースとなっ

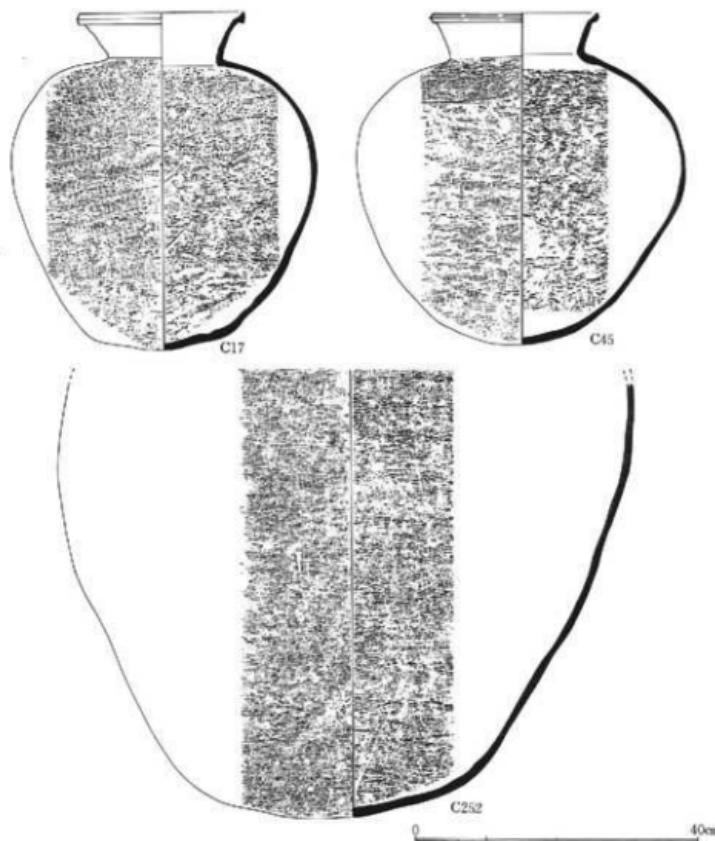


第68図 第1群遺構図

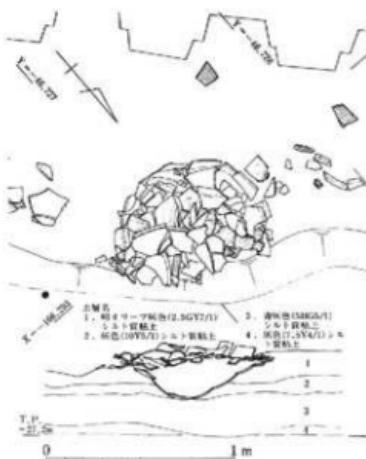


第69図 第1群出土遺物

ている土と土器の内側に溜まっている土とは同じ暗オリーブ灰色シルト質粘土である。C77・78-O Sの内側には上半部の土器が1点も認められなかつたので、これらは完形のまま一旦埋まり、中世期に削平を受けたと考えられる。付近の第3層出土の土器で、同一個体になるものを確認することはできなかつた。また、C77・78-O Xそれぞれの、底のレベルはそれぞれT.P.+27.4mを測る。個々の土器には掘方を確認することができなかつた。この場所に土器がもたらされたのは、暗オリーブ灰色シルト質粘土が堆積している段階であると考えられる。



第70図 第1群出土遺物



第71図 第2群遺構図

C77-O Xの南側にある中型甕は、口縁部を上にした状態で検出された。また、南東部には上半部が下半部に落ち込んだ状態で中型の甕が1点見られた。一方、C78-O Xの南側でも、中型の甕の上半部が下半部に落ち込んだ状態で検出した。これら3つの土器の底のレベルはT.P.+27.45m、T.P.+27.5m、T.P.+27.4mを測る。そして、これらの回りには杯身、杯蓋が散在していた。ほとんどは、完形品である。

なお、この土器の南東側に径60cmの土壌状の落込みを確認した。掘ってみたところ明瞭ではなく、落込みのようなものと判断してい

る。従ってこの周辺では、何ら人為的な遺構を確認することはできなかった。

甕（C70）がC77-O Xで、復原口径42.8cm、器高105.4cmを測る甕である。口縁部から頸部にかけての歪みが著しい。体部はあまり横に張らず、縱長である。

甕（C252）がC78-O Xで残存高65.5cmを測る。こちらは、上半部が削平されて残存しない。胴径はC77-O Xとほぼ同じであり元々はC77-O Xと同規模の甕であったと考えられる。

杯身は全部で5点出土した。内3点を（第69図）に示した。

**第2群（第71・72図 図版41）** K13X Sに位置する大型甕である。体部上半が甕の内部に落ち込んだ状態で検出された。土器の周囲の土と、中に溜まっている土とは同じ明オリーブ灰色シルト質粘土であった。これは土器がこの場にもたらされ、一定の期間、正立した状態にあり、ある程度明オリーブ灰色シルト質粘土が堆積した後、上半部が壊れた事を示している。

土器を検出したレベルはT.P.+27.7mである。そして、底のレベルはT.P.+27.4mを測り、土器群の中では最も低い。

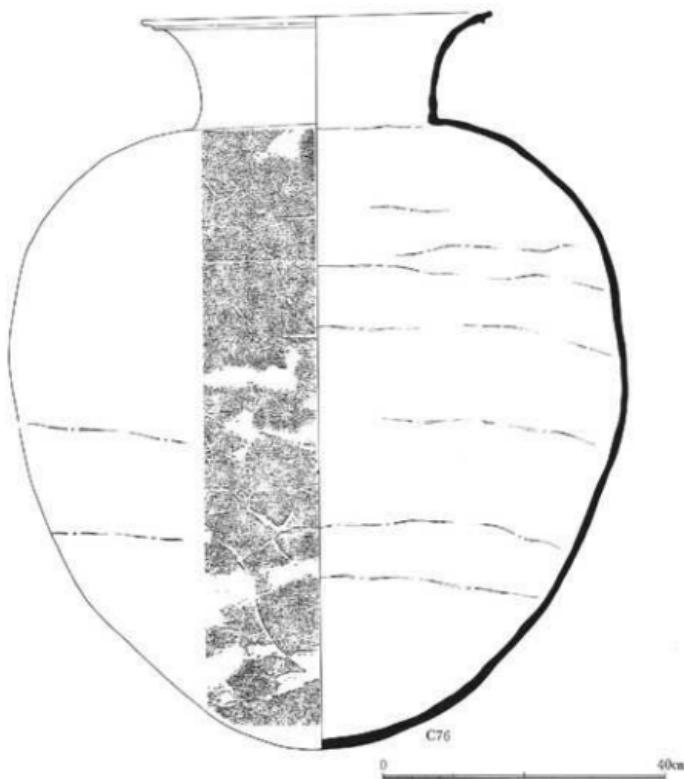
土器は口径49.5cm、器高102.6cmを測る。縱長の球形の胴部に、ほぼ直立する頸部をもち口縁部にかけて大きく開く。口縁部直下には1条の凸帯が巡る。体部内面は青海波紋を丁寧に擦り消しているが、わずかに痕跡が認められる。巻き上げ・タタキ成形をおこなっ

ており、内外面に粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。この土器は今回検出した土器の中では型式的にも古い。

また、この土器の南側では別個体の甕の小破片を検出した。復原しても図化に耐えられるものはなかった。検出したレベルはC151-O Xとほとんど同じである。

第3群（第73～76図 図版40・41・123・124）

調査区の西端であるK13WR付近に位置する。この地点より西側は濃登ノ池の堤であり、急にレベルが上がる。今回検出した4群の中では最も器種が豊富で、個体数も多い。器種の内訳は杯身28点、蓋8点、高杯1点、器台1点、提瓶1点、甕1点、樽形甕1点、壺2



第72図 第2群出土遺物

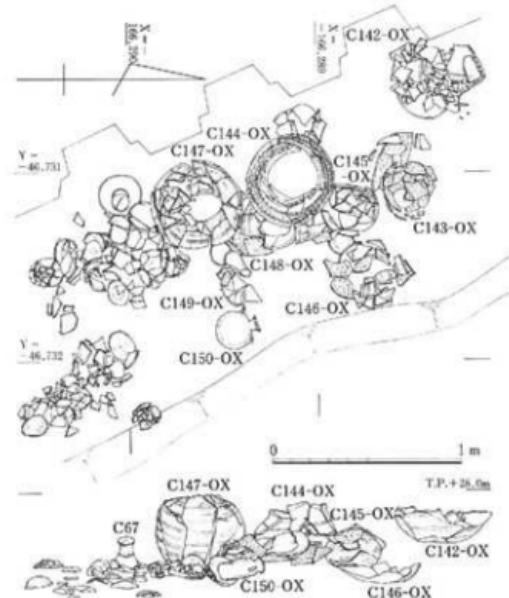
点、要8点である。北側に壺、甕、提瓶等が、南側に杯身、蓋、高杯が集中している。壺と甕は、先に述べたような大型のものは認められない。復原すると完形になるものが4点、底部だけのものが2点、C50に示したように口縁部だけが転落した状態のもの1点が検出された。これと接合できる土器は、今回の調査では確認することが出来なかった。

C147-OXの甕の横には壺(C9)と(C39)に示した壺、甕が横倒しの状態で検出された。

それぞれの底部のレベルはT.P.+27.5m~27.7mを測る。

また、これらの壺と甕の東側では樽形甕と甕が相接して出土した。この2点は最初に掘削した先行トレンチにおいて出土したものであるが、レベルから第3群に伴うものである。

南側には、器台(C67)の脚部だけが直立した状態で検出された。この台部はその付近で破片の状態で検出された。杯類はK13WRで $1.4 \times 0.8$ mの範囲の中だけに集中していた。全部で36点が折り重なり出土した。杯などの検出レベルあるいは甕などのレベルは、南側の杯類が低く、北側へいくにつれて高くなる。その器台(C67)は口径32.1cm、器高24.8



第73図 第3群遺構図

cmを測る。生焼けのため淡黄色を呈する。台部の底にヘラ記号がある。脚部には4つの丸い透かしが入る。ほかに類例のない器形といえる。C69は樽形甕である。全体のシャープさはなくなっており、口縁部の形態からも樽形の中でも型式的に新しい部類に属する。側面には粘土が剥離して穴の開いている部分がある。

甕(C68)は口縁部の歪みが著しい。頸部

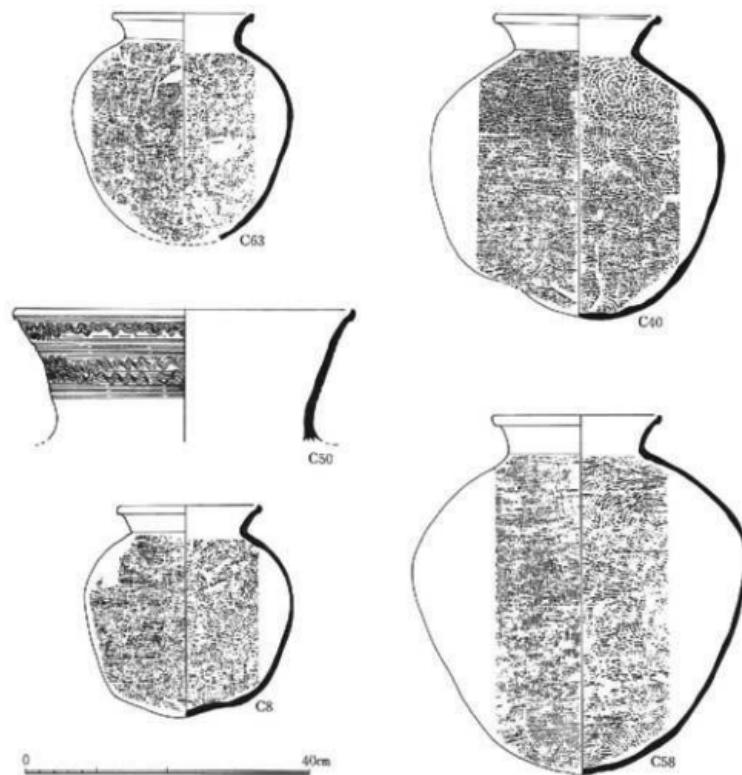
には波状文の下にカキメが施されている。

C 9は口径10.0cm、器高13.3cmの壺である。灰白色を呈し瓦質であるが焼成はあまい。調整はあまり明確ではないが、ナデと考えられる。

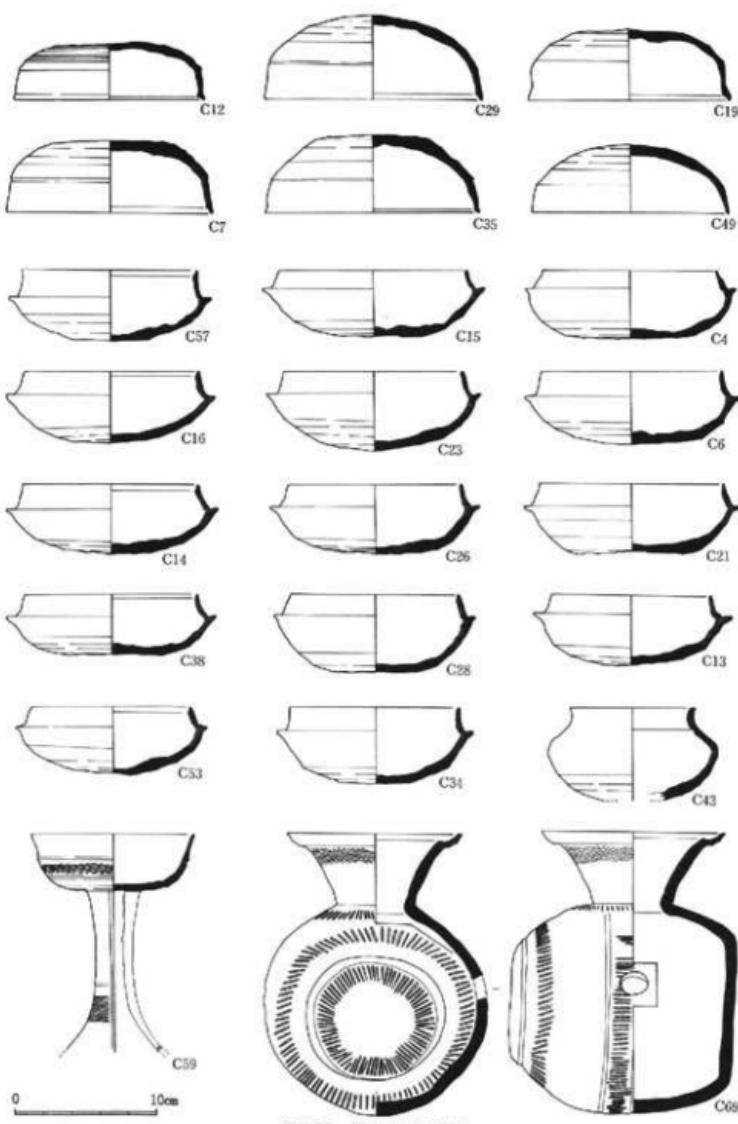
C 39は口径20.0cm、器高31.0cmの長頸壺である。体部内面には同心円文が施される。これも頸部より上は歪みが著しい。

高杯（C59）は、土器群全体でこの1点だけである。長脚1段透かしであるが、脚裾部は残存していないかった。

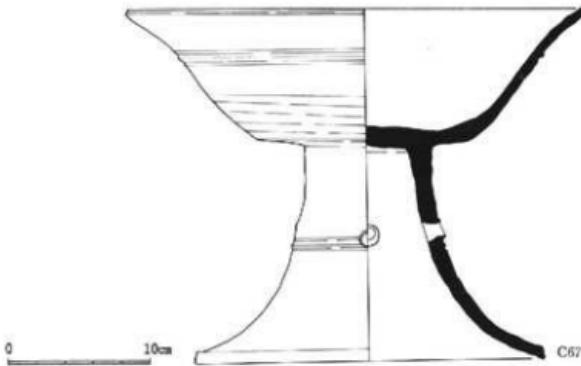
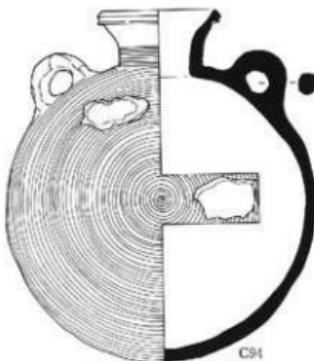
杯類は20点を示した。蓋は口径10.8~15.0cmを測る。口縁端部には、段のつくものとそ



第74図 第3群出土遺物



第75図 第3群出土遺物



0 10cm

第76図 第3群出土遺物



第77図 第4群遺構図

うでないものがあるが、段のつくものが多い。身は口径12.7~15.2cmを測る。やはり口縁端部には段のつくものとそうでないものがあるがこちらは段がつかずに、丸く終わっているものが多い。

## 第4群（第77・78図 図版41）

K13V Q付近に位置する。壺5

点、蓋1点、杯身1点が検出された。検出したレベルはT.P.+27.9mである。ここは、他の3箇所と比べると破片が小さかったが完形に復原できるものも見られた。

これらの土器群は、全部で23個体の土器からなる。内訳は、杯身34、蓋9、壺3点、甕19点、高杯1点、樽形甕1点、壺1点、提瓶1点、器台1点である。生焼けのものは器台を始めとして数点はある。また歪みのあるものは杯、甕等に認められる。時期は第2群が中村編年I型式2~3段階で他はII型式2段階前後に相当すると考えられる。

発見の当初、須恵器甕のうち1点が直立し、1点が横転した状態で検出されたこと、その後も甕の多くが底を下にした状態で検出されたことから、単なる土器溜まりではないかも知れないということで調査を進めた。

では、この土器群はどのような性格と捉えればいいのであろうか。調査中には甕棺、墓の供獻土器、須恵器の集積場あるいは選別場、川ぎわの祭祀場、窯の灰原の土器、投棄されたものなどの可能性を考えた。

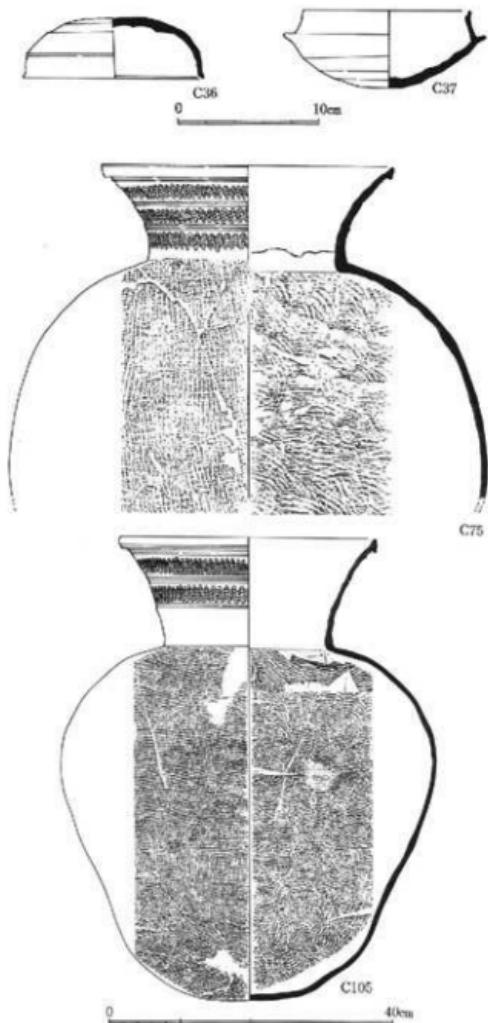
土器自体の掘り形は確認できず、周辺に遺構も存在しないことから前二者についてはないと考えている。集積場、選別場とするには、土器の量が少ないうであるし、歪みの少ない良好な土器も見られるので、妥当であるとはいえない。祭祀跡にしても同じで、積極的に肯定する材料は見あたらない。また、灰原の土器であれば、今回の調査区のさらに西側でも土器が統いて多量に出てくるであろう。しかし、第2次調査では、あまり多くの土器は出土していないとのことであり、これも考えにくい。土器群は、現状では何等かの意味付けをすることは難しい。

## 第4項 奈良時代

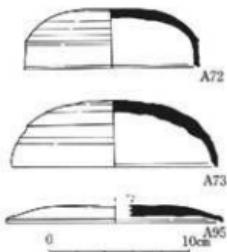
B・C261-O S（第80図 図版49）K14X JからK13MV付近に位置する。幅は約1.2m、

深さは約0.5mで断面はV字形をしている。調査区内を南東から北西方向に延びており、北西・南東端は調査区外に出ているためその規模は不明である。K14Q B付近では約1mにかけて幅が4mに広がる。埋土は、C地区内では上層部分がオリーブ灰色粘土質シルトに多量の粗砂が混入しており、下層部分は緑灰色粘土質シルトに粗砂、礫が混入している。下層上部には植物遺体の堆積が薄く見られ、水が流れていた溝が、人為的に埋められたと考えている。またこの溝が埋まつた後にC310-OBが建てられている。

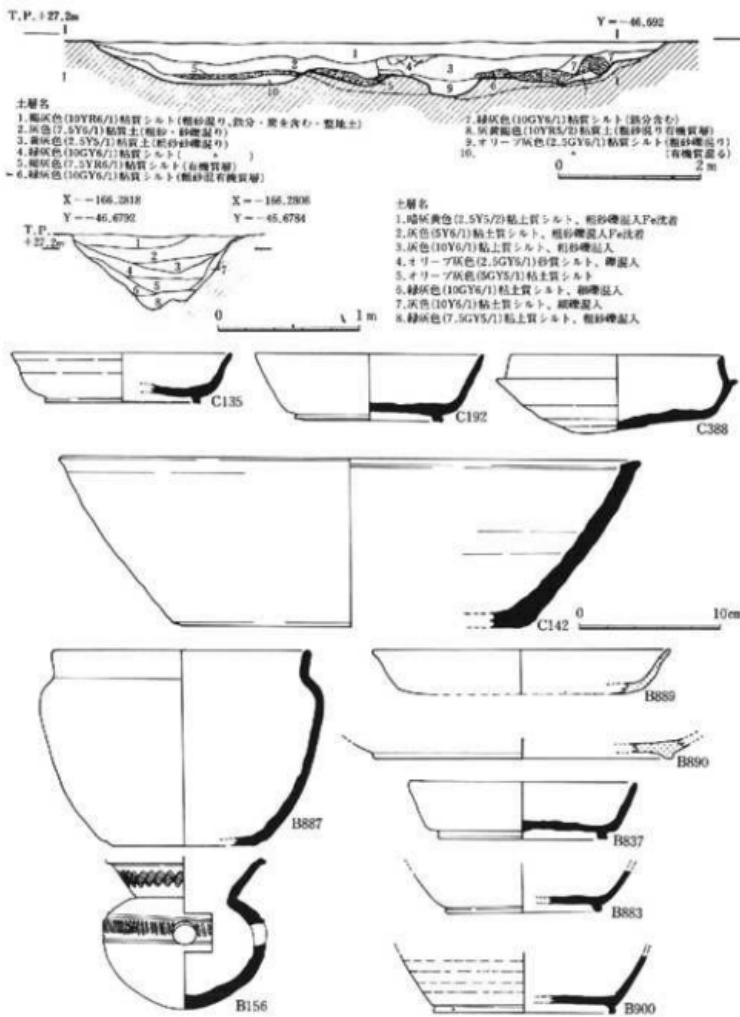
出土遺物は須恵器（杯身/



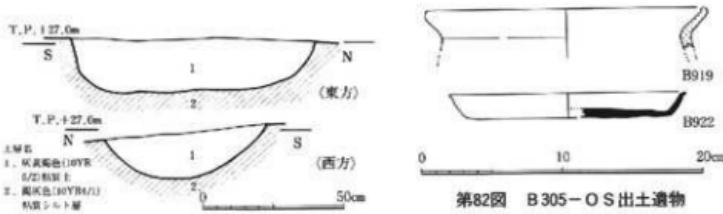
第78図 第4群出土遺物



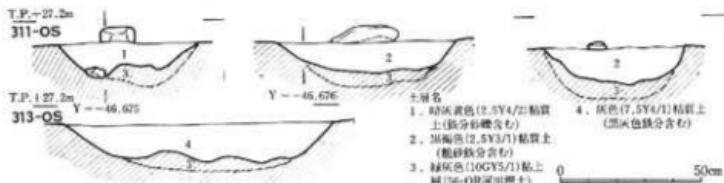
第79図 A地区包含層  
出土遺物



第80図 B・C261-O S 土層断面図・出土遺物・B313-O S (B900) 出土遺物



第81図 B305-O S 土層断面図



C135・192・388、盤／C142、杯蓋、壺、甕)、土師器(甕)などがある。

#### B305-O S (第81・82図 図版38・45)

B2区の中央部溝群のK14 I E～I Hで確認した溝である。B309-O Sに切られ、古墳時代溝群に挟まれた格好になっている。検出した長さは約1.3mを測りB1区や4区では確認されなかった。調査区の側溝で切り合い関係・広がりについてはもう一つ明確ではない。溝は幅約0.8～0.5m・深さ約0.3mで断面逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色粘質土であった。

埋土中からは4点の土器が出土した。(B922)は奈良時代の須恵器杯である。溝は南北に広がるB150・B90・B601-O BやC地区建物群の軸辺にはば平行して走っている点から判断して、奈良時代建物群の関連施設になる可能性が想定できる。一種の区画溝的な性格と判断できるがこれ以上長いものではないようである。

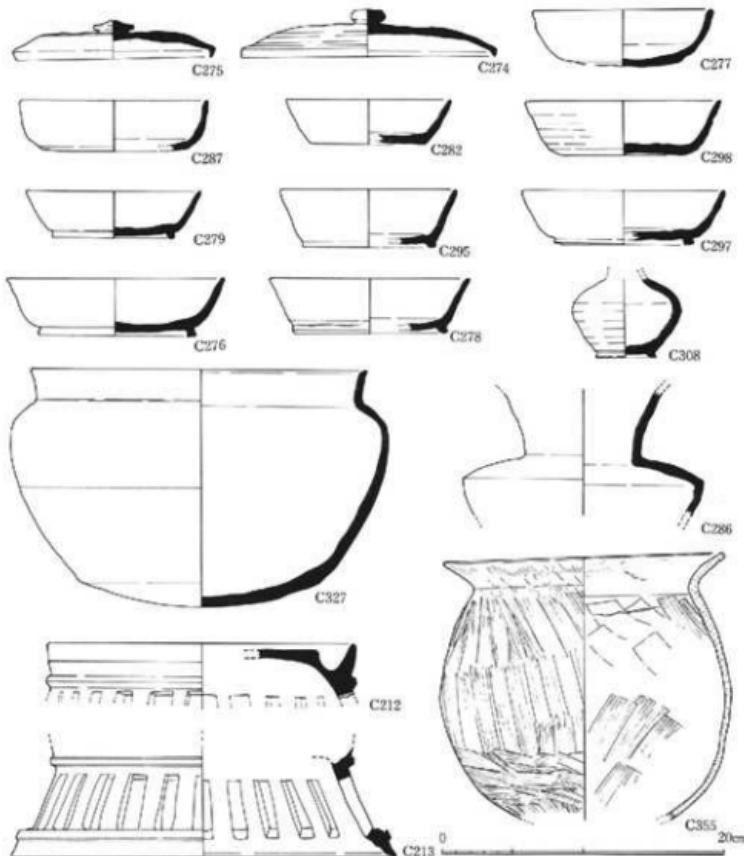
#### B311-O S (第83図 図版45・49)

B2区のK14 O G～K Eで検出した溝である。B313-O Sの西に位置する南北方向の溝であり、南側はB90-O Bの手前で消失する。溝は地形に沿って北へ行くほど低くなっている。検出長約17.8m・幅約0.8～0.5m・深さ約0.1mで、断面U字形を呈する。埋土は暗灰黄色粘質土であった。埋土内より破片数で18点の土器が出土した。その内訳は、須

恵器杯身1点・蓋5点・杯身ないし杯蓋1点と土師器甕7点・器種不明4点である。

(B392)は須恵器の杯蓋の破片であり、I型式第5段階に相当する。(B393)は土師器甕の口縁部の破片であった。

B・C地区に展開する建物群の軸線に溝の方向が一致する。溝は一種の排水溝としての性格を持つと思われるが、具体的には不明である。出土遺物からは奈良時代溝とは判断できない。ただ、溝の埋土・方向性から鎌倉時代のB144-O Bに伴う可能性もすてきれない。



第84図 C 356 - O S 出土遺物

い溝である。

B313-O S (第80・83図 図版45・49)

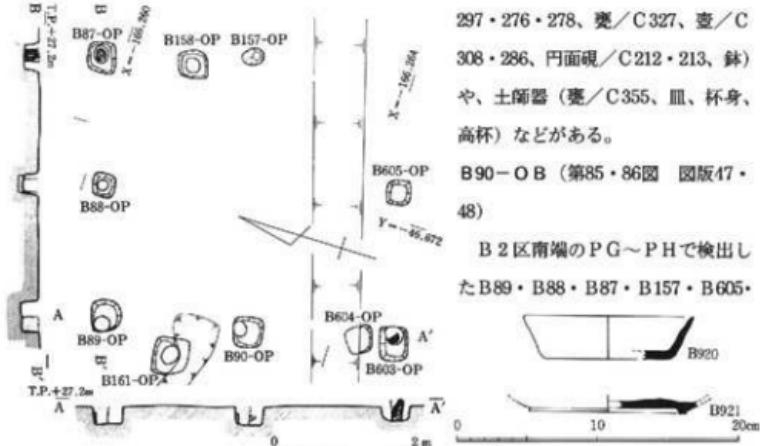
B2区MF～OGで検出した溝である。調査区に斜交するようにして、南北方向に走る。検出長約8.6m・幅1.0～0.6m・深さ約0.15mで、断面U字形を呈する比較的浅い溝である。底面のレベルは北側ほど低い。

埋土は単一層で、基本的にはシルトないし砂質土から成る。埋土の状態から見て滲水状態であったと考えられる。

遺物は、古墳時代の須恵器にまじって奈良時代の土器が出土した。土器は小破片が出土したに過ぎず時期については、明確ではないが、溝はB・C261-O Sとほぼ平行しており、奈良時代の溝と考えて矛盾がない様である。B～C地区に広がる建物群との関連が考えられ、建物群ないし集落から延びる溝として意味深い。

C356-O S (第84図 図版51) K14S K付近に位置する、C354-O Bに平行して、ほぼ南北方向に幅1.6m、深さ0.1mの規模で続く全体に浅い溝である。北端はK14Q K付近でなくなり、南端はB・C133-O Sに切られている。おそらくC823-O Xと関係が深く、井戸 (C667-OW) の関連施設と考えられる。埋土は、灰白色シルトに微砂、礫が混入し、Feが沈着しMn斑がある土である。

出土遺物は須恵器 (杯蓋/C-275・274、杯身/C277・287・282・298・279・295・



第85図 B90-O B 造構図

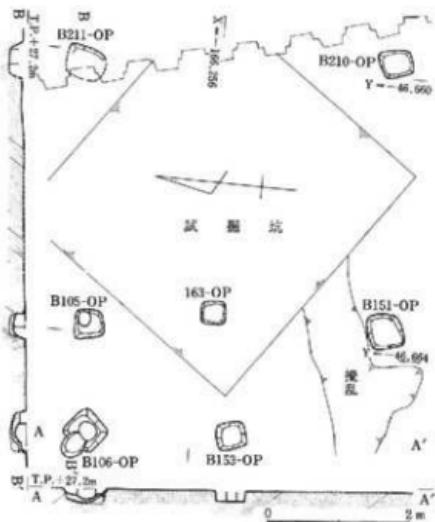
第86図 B90-O B  
(B90-O P) 出土遺物

B603・B90・B604-O Pで構成される建物である。

南東隅の柱穴は確認できなかったが、建物は桁行2間(4.1m)×梁行2間(3.9m)の南北棟建物で、面積は約16m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-17°-Wを計る。柱間寸法は桁行が2.0m・2.1m、梁行は西から2.0m・1.8mとやや不揃いである。柱掘形は一辺45~35cmの方形もしくは不整方形を呈し、南北柱列のまん中の柱掘形は他よりやや小さい。柱痕跡は直径24~16cmで、B87・B603・B605-O Pで柱根が遺存していた。この内、B87-O Pは径20cmのしっかりしたものであった。B605-O Pは、径約15cmと細い。材質は共に檜と思われる。中央部でB158・B157-O Pを検出したが、B157-O Pは柱穴とは考えることができないピットであり、B158-O PはB92-O Fを構成する柱穴の可能性が大きく、柱間は狭くなりB90-O Bの柱穴とは考えられない。全体的にC地区に比べ柱穴の残りは浅い。これはC地区に比べ遺構面が後世の水田造成で約30cm以上の削平を受けた為と判断できる。出土遺物は、甕の口縁部や須恵器杯の破片であった。

B105-O B (第87図 図版46)

B2区北東隅K14O I~O J付近で検出したB105・B106・B153・B151・B210・B211-O Pで構成される建物である。試掘坑と現代の暗渠・矢板で破壊されており、6個



第87図 B105-O B遺構図

の柱穴を確認したのみであるが、隅柱(B106・B210-O P)痕を確認したので、桁行3間×梁行2間の身舎を復元想定した。桁行総長は5.3m・梁行総長は4.2mを測る東西棟の建物である。柱間は、梁行では2.1m等間だが、桁行では2.1・1.6mである。身舎の柱掘形は一辺50cm前後の方形を呈するが、不整方形を示すものもある。検出された柱痕跡は直径20cm前後を測る。全体的に他の建物の柱穴に比べて浅い。B106-O Pでは

抜き取りと思われる広がりが確認できた。南側の建物B150-O Bと重複するが、柱掘方の直接的切り合い関係はない。建物面積は、約22.3m<sup>2</sup>で、主軸方位は、座標北から測って85度東にあたるN-85°-Eである。

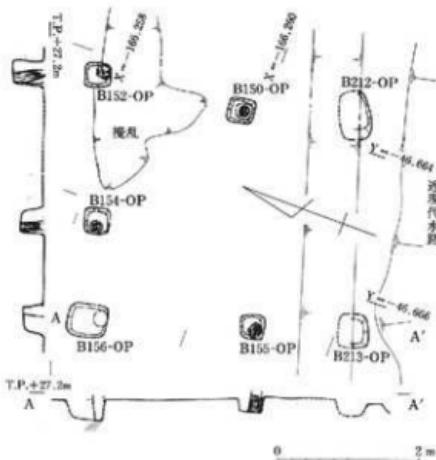
遺物は、柱穴から須恵器・土師器が出土しているが、明確な時期を示すものはない。

B150-O B (第88・90図 図版48)

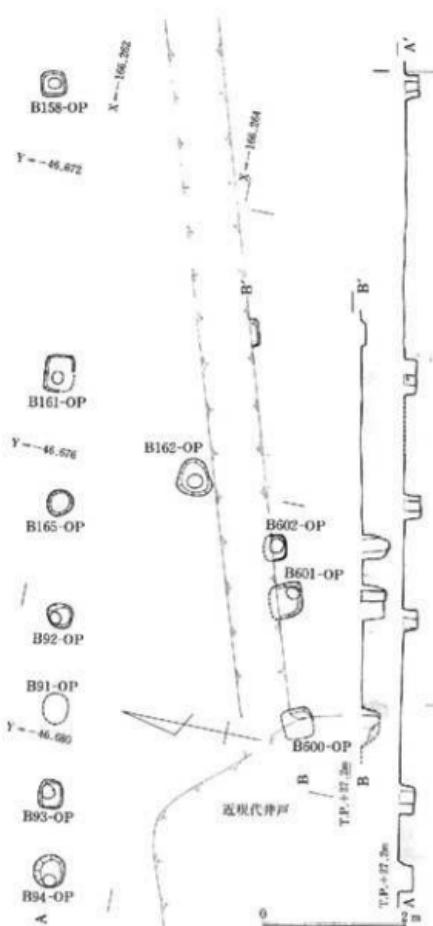
B1区の南東隅K14O I～P Iに位置する建物で、B154・B156・B155・B213・B212・B150・B152-O Pで構成される。

桁行2間(3.7m)×梁行2間(3.6m)の南北棟の建物で、面積13.3m<sup>2</sup>を復元した。柱間は桁行が2.1m・1.6m、梁行は1.5m(2.1m・1.5m)とばらつきを見せる。また柱穴の直接的切り合いではなくB105-O Bと重複するが、前後関係はわからない。桁行西柱列の延長上に存在するC792-O Pを通る柱穴の存在も考えることができるが柱間がやや長いので除外しておくのが無難であろう。柱掘方は一辺46～38cmの方形で、柱痕跡は概ね20cmを測る。柱根がB150・B152・B154・B155-O Pに遺存していた。その中でもB150-O Pは比較的残存状態がよく、径18cmを測る。材は檜であろうと思われる。主軸方位はN-20°-Wを計る。

この建物に関する事実として、建物の北側柱列とB90-O Bの梁行柱列・南側柱列とB601-O Bの桁行北柱列とが一直線上にのる。つまりB150-O Bの妻柱列をまっすぐ西へ延ばして行けば、B90-O Bの妻柱列になる。さらに、B90-O Bの桁柱間とB150-O Bの柱間の間隔は2.1mを測るが、これはB601-O Bの柱間の長さに等しい。また身寄の梁行の長さにもほぼ等しい。即ち、B150・B90・B601-O Bは計画的に造営され、同時に存在した可能性が強い。



第88図 B150-O B造構図



第89図 B601-O B・B92-O B遺構図

22cmで表面を丁寧に削っている。年輪幅はB150-O Pの柱根などに比べ広い。

C200-O B（第91図 国版51・52）K14T H付近に位置する。方位は、N-13°-Wである。規模は、梁行5間（8.47m・29尺）桁行2間（4.38m・15尺）である。梁行5間の内中央の3間目が5尺の他は6尺である。建物に伴う柱穴は全部で13個検出した。南辺西端

### B601-O B（第89・90図 図版48）

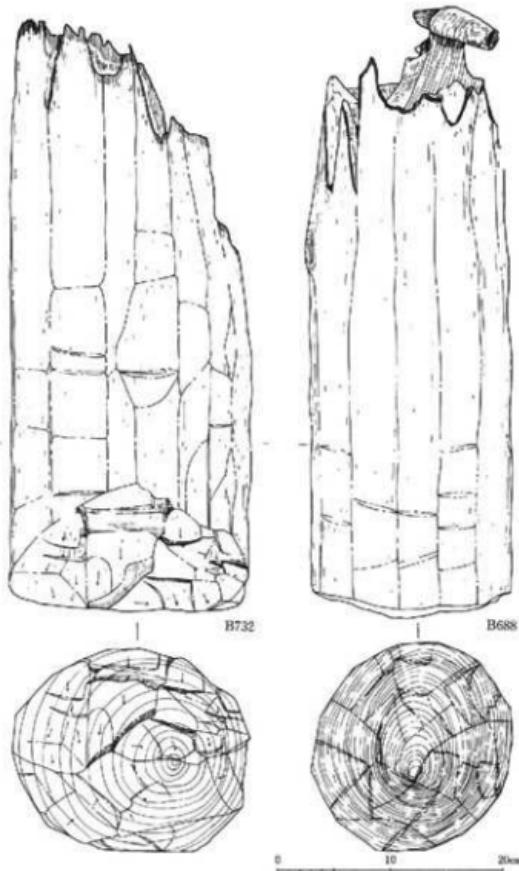
B2区K14Q Fで2個（B601・B600-O P）の柱穴を確認した。現代井戸（C773-O W）と矢板・側溝の擾乱が激しく、北側柱列だけで全容は不明である。次の理由で桁行3間（5.5m）×梁行3間（4.7m）の東西棟建物を推定する。つまりB601・B600-O Pの柱間は約1.9mと推定され、桁行を3間分延長し、90度展開すると所にC780・C782-O Pが存在し、その梁行柱間を1.9mとすると南側柱列C778・C776-O Pがならび柱筋をそろえる。さらにB601-O Bの柱間は他のB90・B150-O Bなどと同じく柱列寸法は同一となる。以上のように考えるとB601-O Bの面積は約25.9m<sup>2</sup>を測る。なお、B601-O Pの柱据形は一辺0.5mの方形で、柱根がよく遺存していた。かなりしっかりした徑

の柱穴は、試掘トレ  
ンチによりなくなっ  
ている。ほとんどが  
方形で、1辺0.5~  
0.6m、深さ0.35~  
0.5mのもので柱痕  
直径は約15cmである。  
C 200・201・202・  
204・207・211・212・  
213-O Pでは、柱  
根が残存していたが、  
ほとんど朽ちた状況  
であった。埋土は灰  
オリーブ色粘土質シ  
ルトに粗砂が混じる  
土である。

出土遺物は須恵器、  
土師器があるが、小  
片のため図化しなかっ  
た。

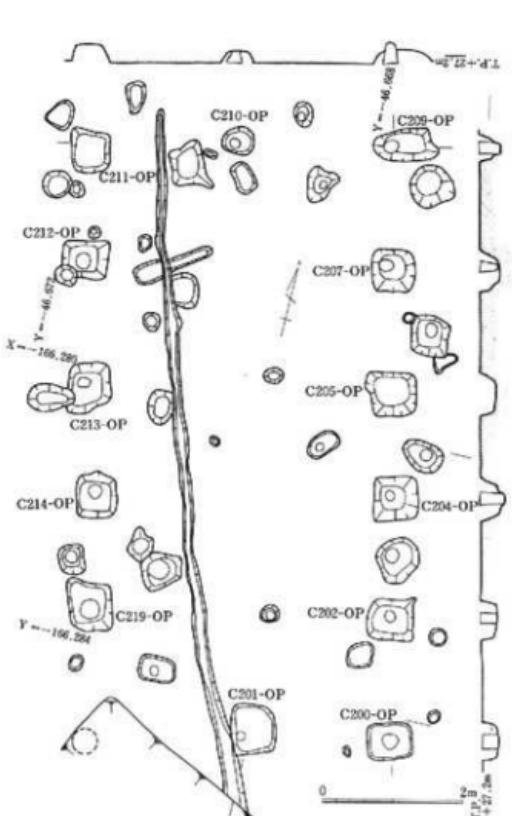
C 203-O B (第92・  
93図 図版51・52)

K 14 T H付近に位  
置する。方位は、N  
- 7° - Wである。



第90図 B 601 (B 732) · 150 (B 688) O P - 出土柱根

規模は、梁行3間(5.4m・18.5尺) × 衝行2間(3.5m・12尺)で、柱間の長さは不揃いである。建物に伴う柱穴は全部で9個検出した。南辺中央の柱穴は欠いている。柱穴の形状は円形ないし方形で、1辺0.5~0.6m、深さ0.4~0.6mのもので柱痕直径は約15cmである。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトに粗砂が混じる土である。C 200-O Bと位置は重なるが、直接の切り合関係はない。



第91図 C 200-O B 遺構図

上部を削平されている。C 639・640-O Pでは、朽ちた状態の礎板、C 270-O Pでは柱根を検出した。埋土は灰白色粘土質シルトに粗砂と礫が混じる土である。梁行方向は、B・C 133-O Sよって切られており、その規模は詳らかでない。ただ、B・C 133-O Sの対岸ではこの建物に伴うと思われる柱穴がないことから、梁行は2間以内と判断できる。

出土遺物は須恵器（杯蓋／C 617、杯A／C 616・C 640-O P）、土師器がある。

C 310-O B（第96・97図 図版53）K 14 T D付近に位置する。方位は、24°Wである。規模は、梁行3間（4.96m・17尺）×桁行2間（3.5m・12尺）である。柱間は梁行方向の

出土遺物は須恵器

（杯蓋／C 613・C

425・C 608・C 420

-O P）、土師器が

ある。

C 270-O B（第94・

95図 図版50）K 14

G X付近に位置する。

方位は、N-23°-

Wである。規模は、

梁行1～2間（1.6

m以上）×桁行2間

（3.2m・11尺）で、

各柱間は約1.6mで

ある。建物に伴う柱

穴は全部で5ヶ所検

出した。形状はほと

んど方形で、1辺0.6

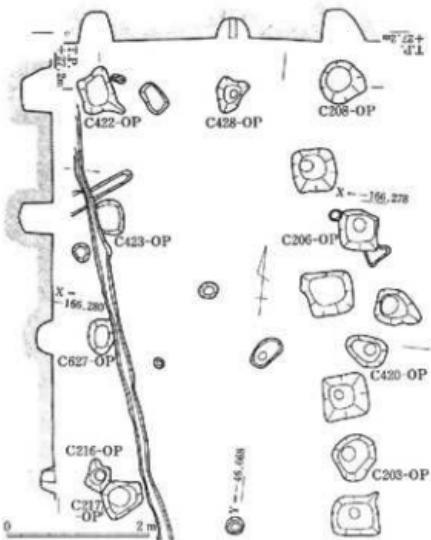
～0.7m、深さ0.15

～0.4mのもので柱

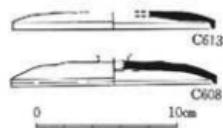
直徑は約20cmであ

る。この建物に伴う

柱穴は全般に浅く、



第92図 C 203-O B 遺構図

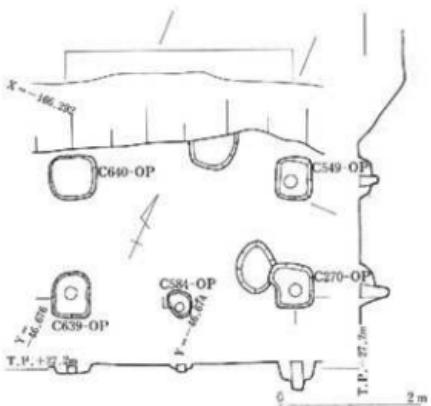


第93図 C 203-O B 出土遺物

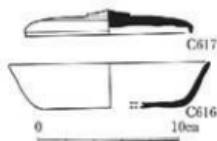
北1間分が約1.6m(5尺)の他は、約1.75m(6尺)である。建物に伴うピットは全部で10ヶ所検出した。その形状は方形で、1辺0.5~0.6m、深さ0.3~0.5mのもので柱痕直径は約15cmである。この建物の東側の一部の柱穴は、261-O-Sが埋まった後に掘られたのである。埋土は暗オリーブ色シルトに粗砂の混じる土である。

出土遺物は須恵器(杯A/C 610・C 315-O P)、土師器がある。

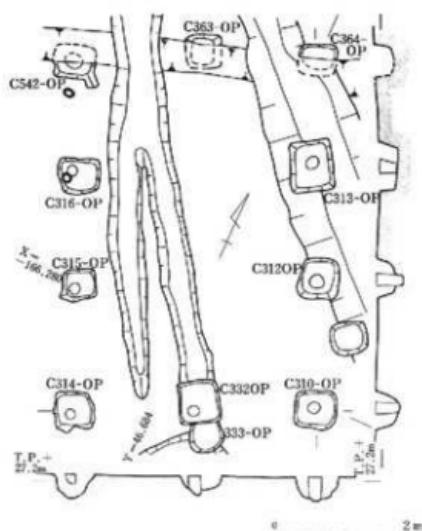
C 326-O B (第98・99・106図 図版51・52) K14R J付近に位置する。方位は、N-8.5°-Wである。規模は、梁行4間(7.30m・25尺)×桁行2間(3.8m・13尺)である。柱間は梁行4間のうち中



第94図 C 270-O B 遺構図



第95図 C 270-O B 出土遺物

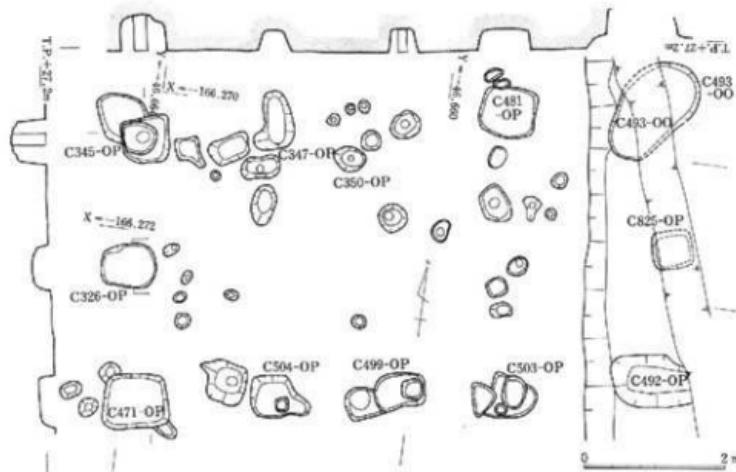


第96図 C310-O B 遺構図

央の2間が約1.75m・6尺で、他は皆約1.9m・6.5尺である。建物に伴う柱穴は全部で12ヶ所を検出した。その形状は梢円形ないし方形で、1辺0.4~0.8m、深さ0.2~0.45mのもので柱底直径は約20cmである。C345-OPにのみ柱根（C372・挿）が残存していた。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトに粗砂が混じる土である。この建物はC356



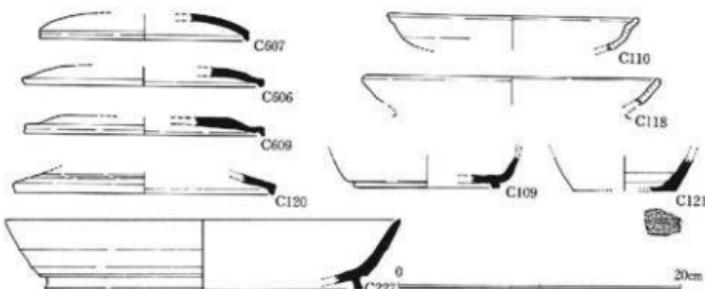
第97図 C310-O B 出土遺物



第98図 C326-O B 遺構図

—OSに切られており、また、C354-OBを切っている。

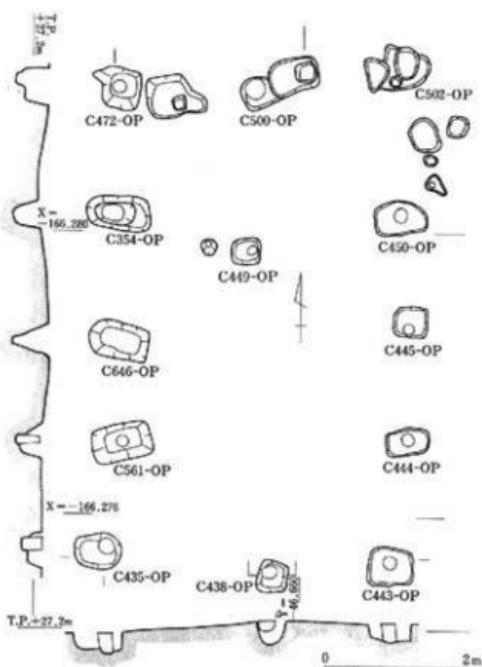
出土遺物は須恵器（杯蓋／C606・C345-OP・607・609・120・C347-OP、杯B／



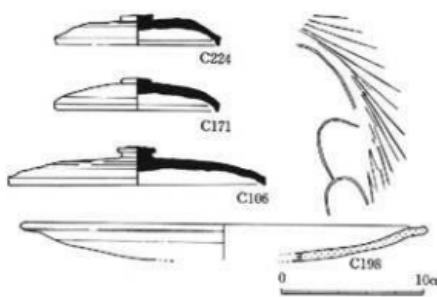
第99図 C326-OB出土遺物

C109・C471-OP・227-  
C481-OP、瓶子／C121-  
C326-OP）、土師器（皿  
A／C110・C471-OP、  
甕／C118・C347-OP）  
がある。

C354-OB（第100・101  
図 図版51・52）K14T J  
付近に位置する。方位は、  
N-2°-Wである。規模  
は、梁行4間（6.7m・23  
尺）×桁行2間（4m・14  
尺）である。各柱間のうち  
梁行方向では南から2間目  
が約1.46m（5尺）の他は  
約1.75m（6尺）であり、  
桁行方向では各約2.04m  
（7尺）である。建物に伴  
う柱穴は全部で13ヶ所検出



第100図 C354-OB遺構図



第101図 C 354-O B 出土遺物

した。その形状は不整形な方形で、1辺0.4~0.9m、深さ0.25~0.5mのもので、柱根直徑は約20cmである。柱根が残っていたのは、C 561-O Pである。埋土は灰オーリーブ色粘土質シルトに粗砂が混じる土である。この建物は、C 326-O Bに切られている。

出土遺物は須恵器（杯蓋／C

224・C 456-O P・171・

C 472-O P・106・C

438-O P）、土師器（高

杯／C198・C472-O P）、

柱根がある。

C 533-O B（第102・

103・106図 図版54）K

14Q H付近に位置する。

方位は、N-13°-Wである。

梁行3間（3.8m・

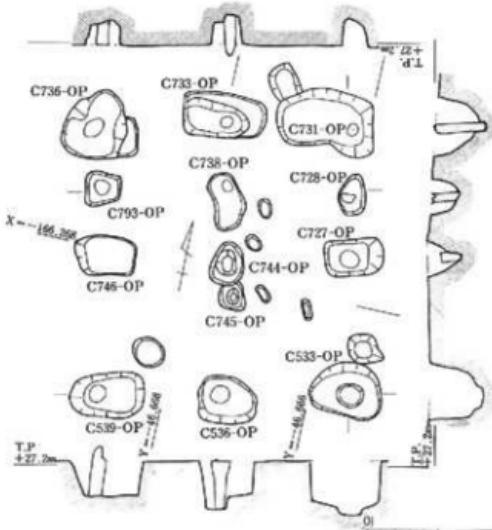
13尺）×桁行2間（3.5

m・12尺）の総柱建物で

ある。各柱間のうち梁行

方向では、北から2間分

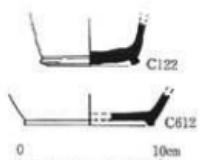
が1.9m（6.5尺）で1間



第102図 C 533-O B 遺構図

が他の1間のはば半分の長さとなり、桁行き方向では各約1.75m（6尺）である。建物に伴う柱穴は全部で12ヶ所検出した。その形状は不整形な楕円形で、長径0.6~1.0m、短径0.4~0.8m、深さ0.4~0.8mのもので柱根直徑は約25cmである。北辺と南辺の6柱穴と、中央の6

柱穴の大きさはかなり差がある。特にC728・738・793



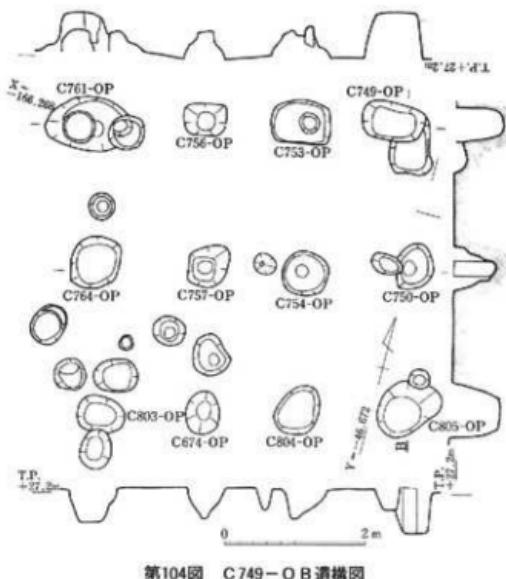
第103図 C 533-O B 出土遺物

—OPは、この建物の他の柱穴に比べ口径が0.4~0.6mと小さく、深さも約0.4mと浅いことから、他の柱とは機能が違っていた可能性がある。埋土はオリーブ灰色シルトに粗砂が混じる土である。各ビット内には拳大の根石が多数認められ、柱根もC536・539・728・731・738・793-O Pとこの建物が一番多く残っていた。柱根の多くは、加工痕が明瞭に認められる状態で出土した。

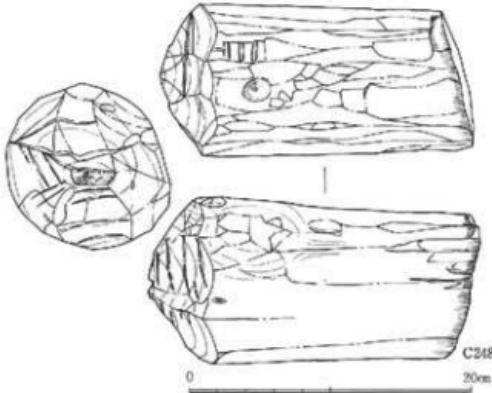
出土遺物は柱根6点(C241・296・318・365)、須恵器(壺/C122・C553-OP・612・C744-OP)、土師器がある。

C749-O B (第104・105図 図版55) K

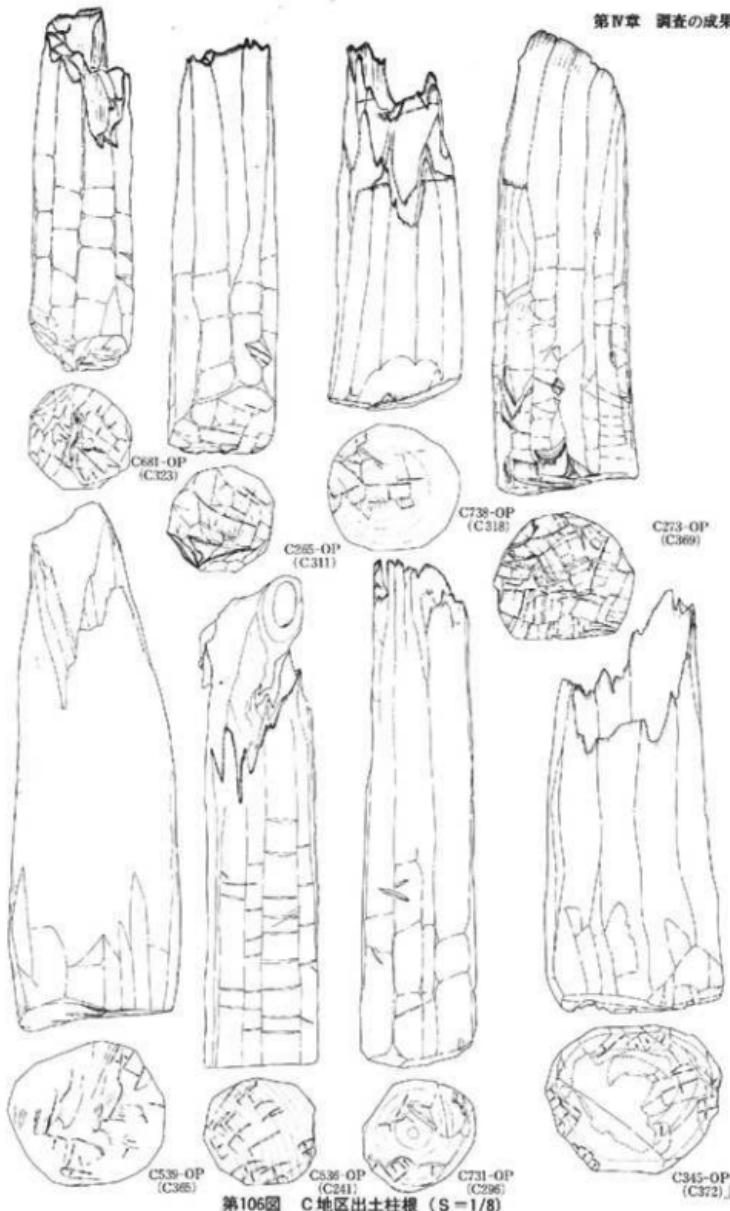
14R G付近に位置する。方位は、N-14°-WとC200・533-O Bと方向はほぼ同一である。規模は梁行3間(4.4m・15尺)×桁行2間(4.09m・14尺)で、總柱建物である。各柱間のうち梁行方向では1間約1.46m(5尺)、桁行方向では1間約2.04m(7尺)で



第104図 C749-O B 造構図



第105図 C750-OP 出土基礎板

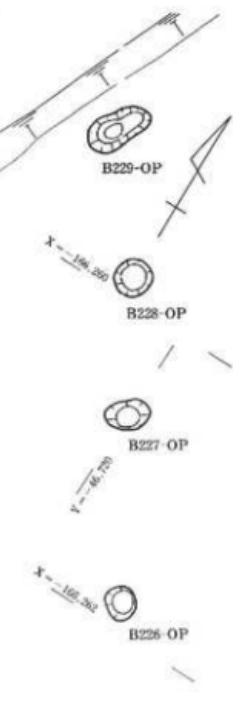


第106図 C地区出土柱根 (S=1/8)

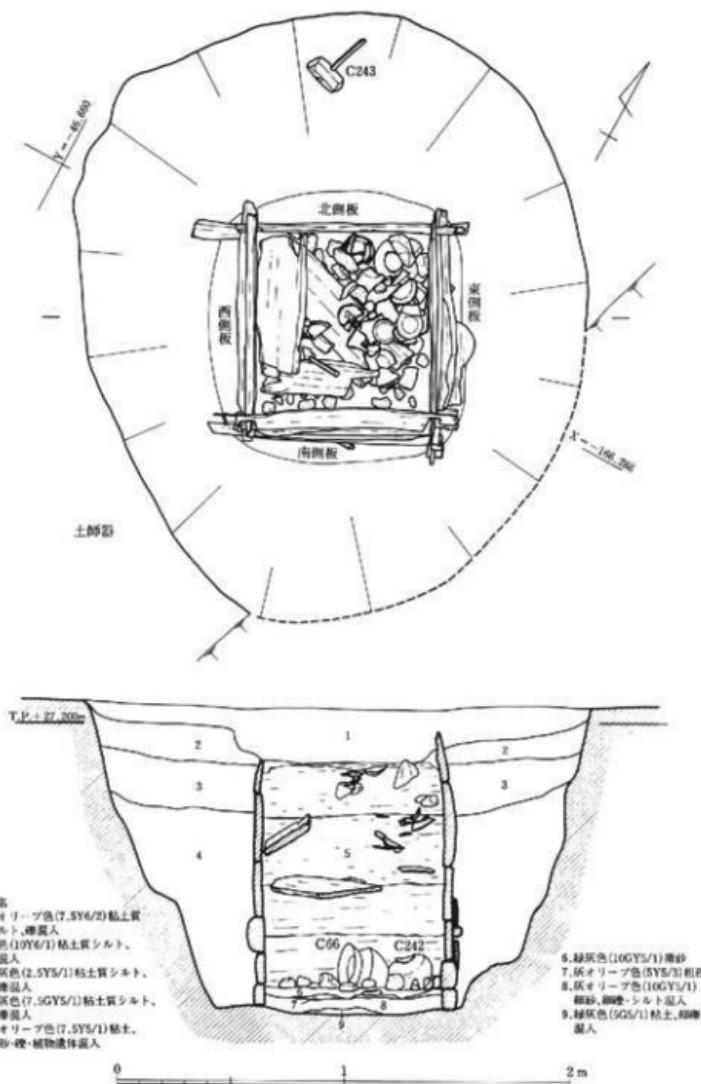
ある。建物に伴うピットは全部で12ヶ所検出した。その形状は、不整形な円形ないし方形で、1辺0.4~0.8m、深さ0.4~0.7mのもので柱痕直径は約20cmである。埋土はオリーブ灰色シルト粗砂が混じる土である。各ピット内には拳大の根石が多数認められ、またC750・754-O Pでは礎板が出土した。C750-O Pの物は、片方の端部を削った丸太を二つに割って礎板(C250・263)としていた。またC754-O Pでは、長さ、30cm、幅20cm、厚さ5cmの板が礎板(C246)に使われていた。出土遺物は須恵器、土師器があるがいずれも細片のため図化しなかった。

C667-O W (第108~117図 図版57~59) K14V K・WKに位置する。掘方の平面は径約2.3mの円形を呈し、断面は深さ約1.4mの2段堀になっている。井戸枠は、井桁状に板を重ねて組み合わせたもので、平面は一辺0.8mのほぼ正方形である。井戸枠は高さ約1.3mが残存しており、主に北7枚、東6枚、西6枚の板材で組み上げられており、部分的に小板をクサビにしている。また、東側には側板が数片見られた。これらの板材は、長さ82~111cm・幅7~38cm・厚み3~8cmである。井戸枠の板材はその厚みと材質の違いから、上下2タイプに分けられる。上4枚ほどは、厚さ3~6cmの板材で組まれ、樹種は杉がほとんどである。また、転用されてきた痕跡は見当たらない。下3枚ほどは上よりも厚い5~8cmの板材で組まれている。樹種は広葉樹がほとんどで、溝やほぞ穴などの加工がなされ、他から転用されてきた様子が分かる。ちなみにC377の樹種は椎であった。

出土遺物は、須恵器(杯蓋/C173・161・162・619、杯A/C317・251・156、杯B/C253・260・261、皿A/C259・258・322、皿A/C257、壺A/C242、壺B/C66、壺L/C254、甕)、土師器(杯A/C164・314・148・315・151・149・604、皿A/C314、高杯/C197・163、甕A/C358、甕B/C357)、土馬の一部と考えられる土製品(C325)がある。また、墨書き器も3点確認され、「上」(C151)・「清(?)水」(C149)・



第107図 B226-O F 遺構図



第108図 C667-O W遺構図

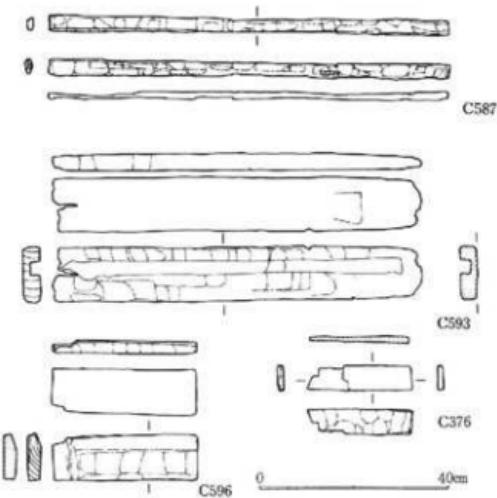
「水」(C148)と読める。他に、井戸枠の一部と考えられる板材が3枚出土した。

遺物はまず、井戸枠上端から下へ0.5m位までに東側を主として須恵器杯・甕、土師器杯・高杯・甕が出土し、中間に板材が北、南、西の順に転落したように重なって出土し、また、井戸底の北東隅から須恵器壺C66・242と、積み重ねた状況の土師器杯C164・314・315・151・149とがまとまつ

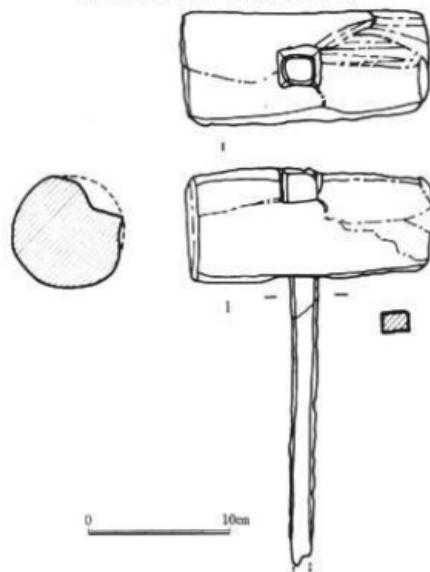
て出土した。井戸枠内の埋土は、灰オリーブ色粘土に植物遺体、粗砂と拳大前後の礫が混じる。井戸底は拳大の礫が敷いてあり、その下は微砂～粗砂の層が10cmほど堆積していた。

井戸の掘り方からは、井戸枠北側で木植(C243)が約T.P.+26.9mの深さから出土した。この木植は片方の打面の一部が欠損している。他に須恵器(杯B/C255)、土師器が出土している。埋土は、灰色系の粘土質シルトの土に粗砂と礫が混じる。

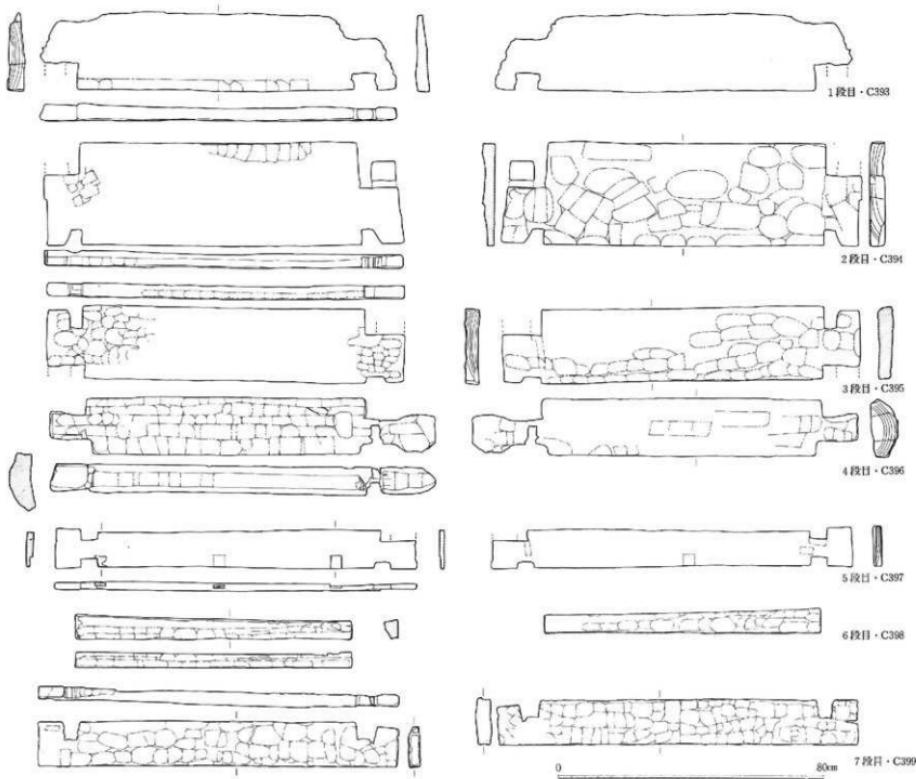
C667-OWの井戸枠内から出土した須恵器と土師器の内訳は以



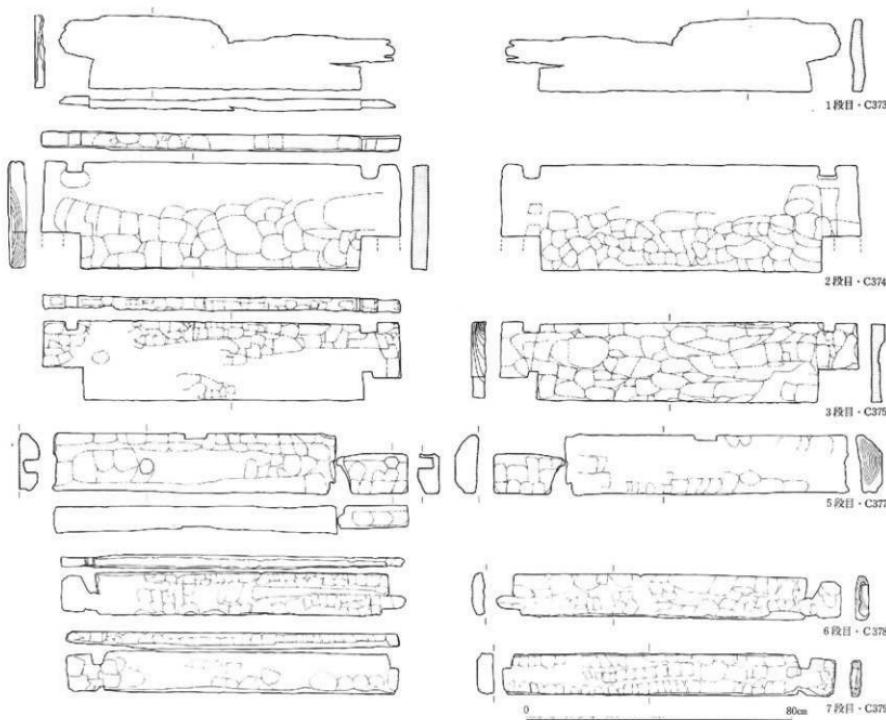
第109図 C667-OW東側板4枚目(C587)  
東側添板(C591) 西側添板(C376)



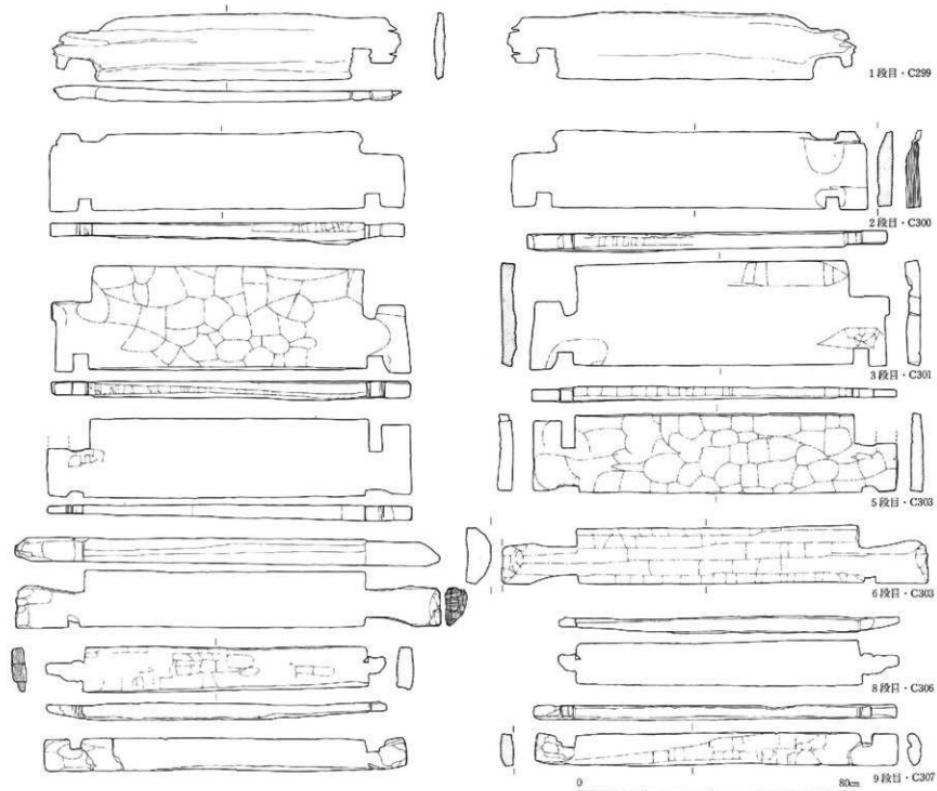
第110図 C667-OW出土木植(C243)



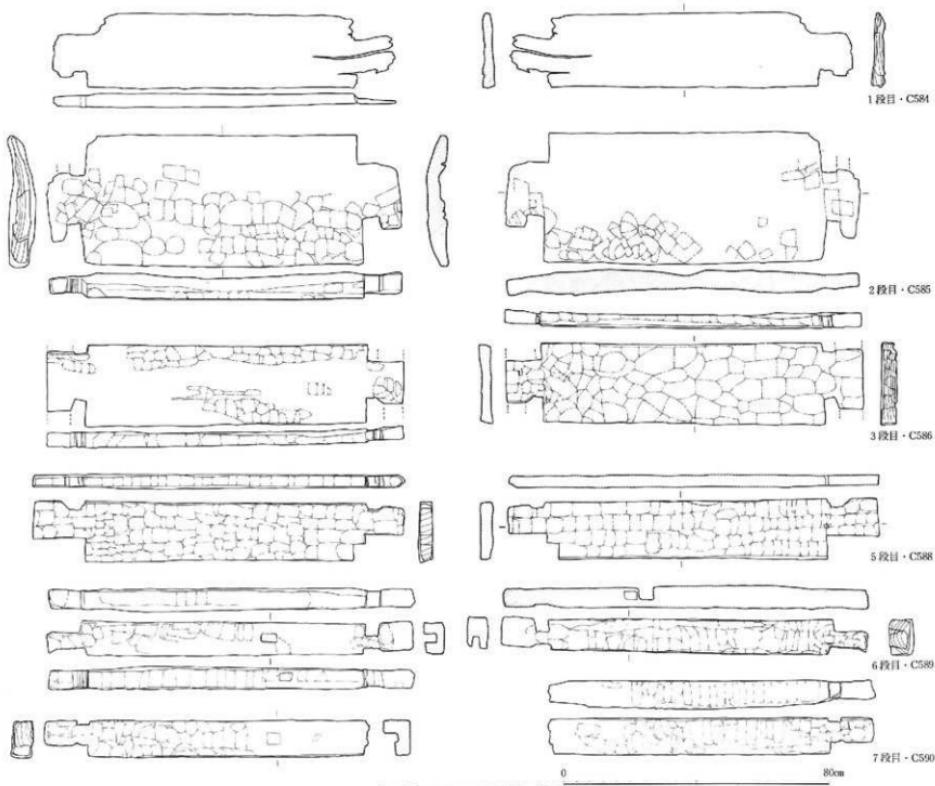
第111図 C667-OW北側、井戸枠



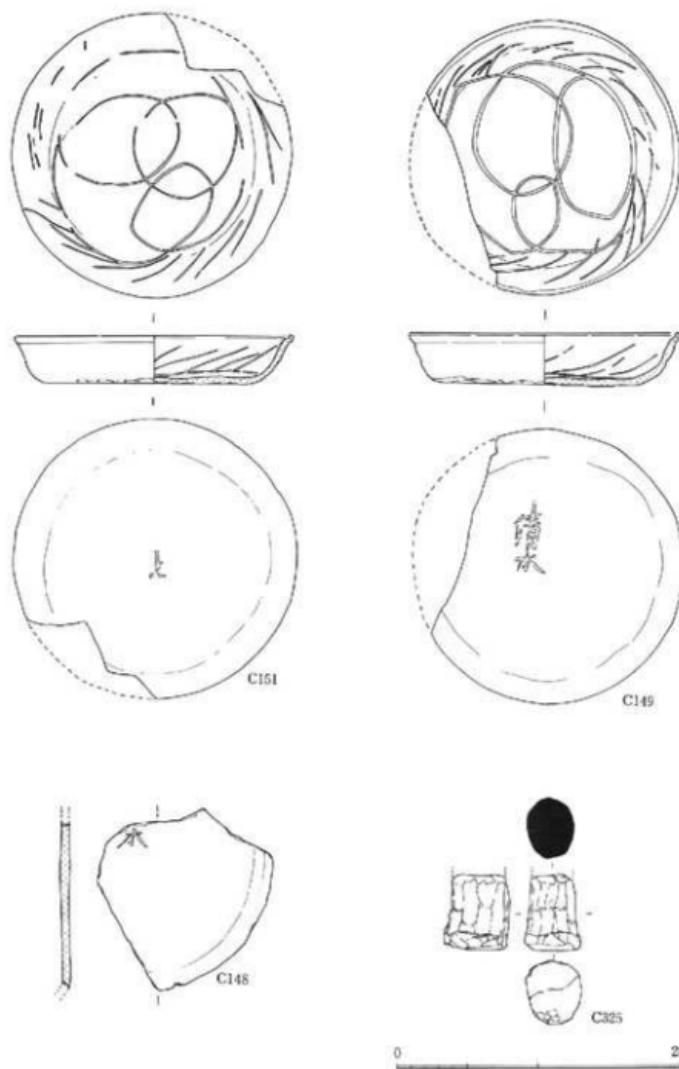
第112図 C667-OW西側、井戸枠



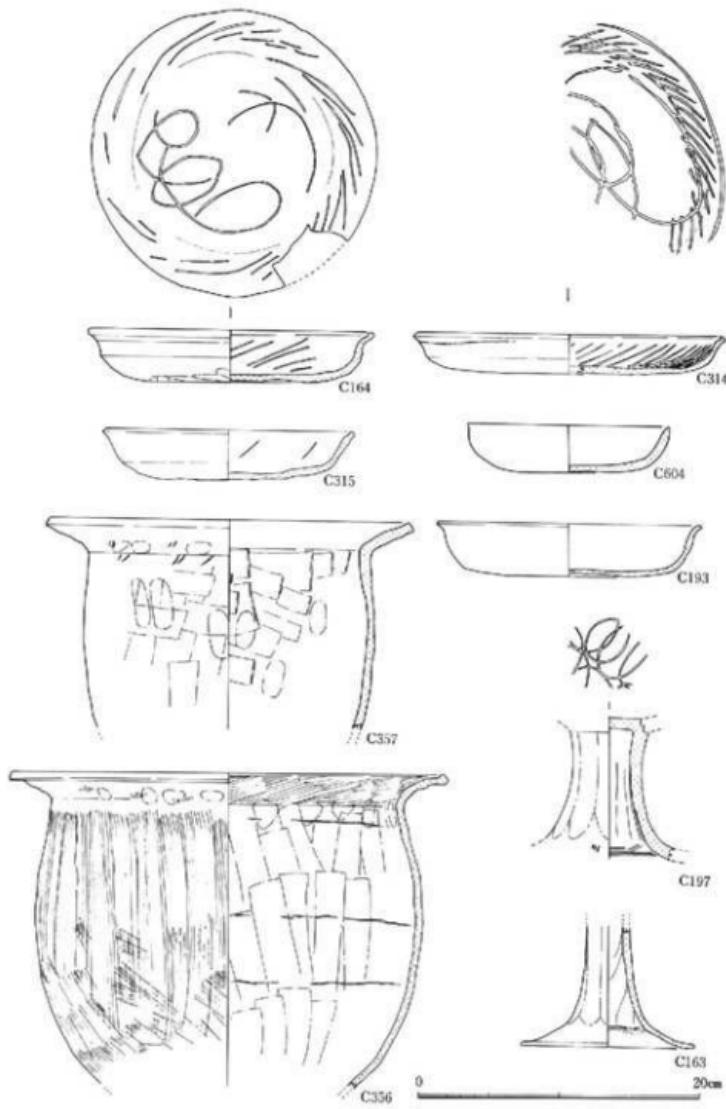
第113図 C667-OW南側、井戸枠



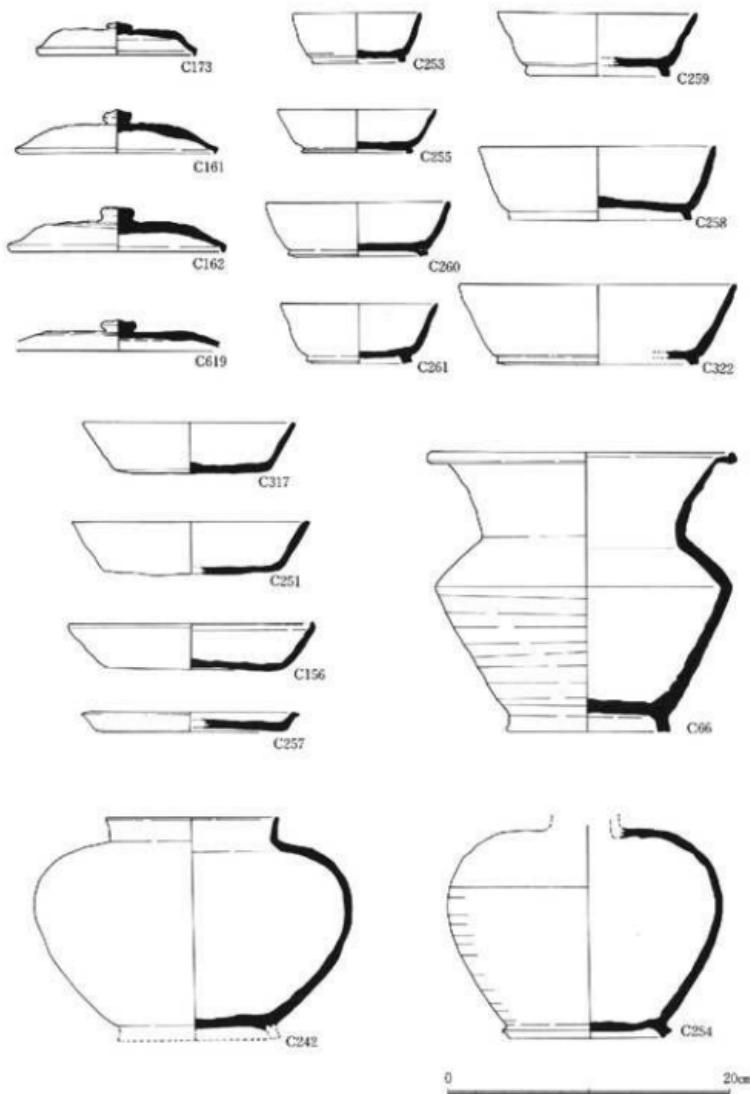
第114図 C667-O.W東側、井戸枠



第115図 C 667-OW出土遺物



第116図 C667-O W出土遺物



第117図 C 667 - OW出土遺物

下の通りである。

須恵器破片総数：土師器破片総数=177:56

須恵器個体数：土師器個体数=55:21

C667-OW出土土器種類別個体数

土師器 杯A 8 盆A 2 高杯2 製塩土器3 壺B 1 壺A 2 壺3 総個体数21

須恵器 杯A 6 杯B15 杯蓋9 杯E 1 盆A 2 壺9 壺蓋1 壺A 1 壺L 1

壺B 1 壺9 総個体数55

B92-O F (第89図 図版47)

B2区のK14P E～PHで検出した柱列で、B94・B93・B91・B92・B165・B161・B158-O Pで構成される。柱掘方は6個並ぶだけで、調査区域ではこれ以外に間連する柱掘方は検出されなかった。柱掘方は一辺約42～34cmの不整方形・梢円形で、柱間が1.2・1.6・1.8mとばらつきはあるものの、建物の一部を構成すると思われたが、結局まとまつたものとはならなかった。構造上から櫛と考えねばならないようである。なお、同一軸線上にB158-O Pがのってくる結果になり、間隔は聞くが一連のものと判断しておきたい。そうなると櫛の長さは約11.4mとなる。主軸方位は、N-80°-Eをとる。

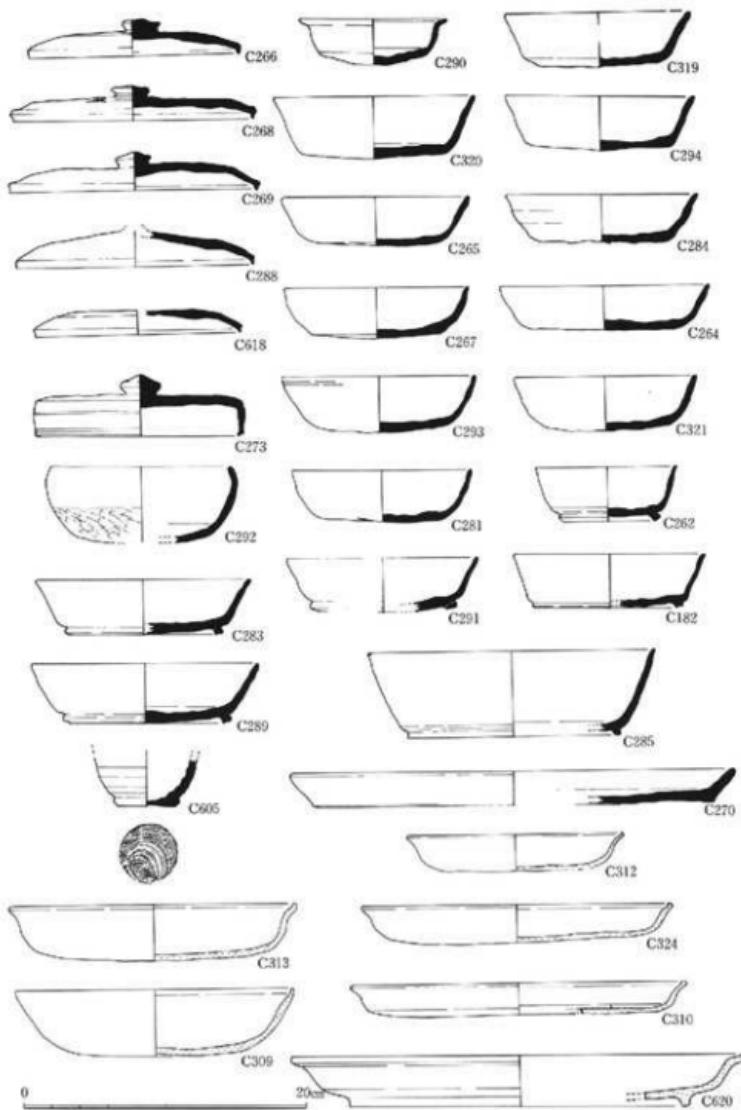
柱穴どうしの直接的な切り合いはないが、B90-O Bとの切り合いや櫛の軸方向から考えて、B92-O FはB105-O BやC地区の倉建物(C533・C749-O Bなど)の軸に平行であり、これらに伴うものと判断して矛盾はないように考える。

柱穴内の出土遺物として須恵器・土師器の細片の他に柱痕埋土上層の踏込面に瓦器細片の混入があった。

B226-O F (第107図 図版80)

B4区のK13P T・OSで検出したB226・B227・B228・B209-O Pのピット列である。西は調査区外に延びる様相であるが、B1区では確認されていない。櫛間は約1.1mであり、検出長約3.7mを測る。主軸方位はN-33°-Wを計る。ピットは30cm前後の円形ないし梢円形を呈し、深さ約20～15cmである。古墳時代河川の砂層の上に穿たれており、埋土はマンガン混じりの褐色粘質土である。性格はよく解らないが、CからB調査区を斜向して存在している様である。B・C261-OSと平行して設けられており、排水溝の内側を巡る櫛としての性格が考えられる。建物群(集落)を区画する溝だとすれば奈良時代集落I期のものとして重要である。

B606・B607・B608-O P (付図1 図版80)



第118図 C 823-O X 出土遺物

B 4 区南部のK13 P S～Q Sで検出された不定形のピットである。形状は不整形と梢円形を呈しており、径約2.5m・深さ約15cm程度のものである。

埋土は焼土・炭混じり灰褐色土が堆積していた。埋土中から多量の焼土・炭が出土した。遺構面自身が古墳時代河川の砂の上に穿たれており、古墳時代河川から巨木が頭をのぞかせていた。この木は上面の一部が焼けて炭化しており、奈良期に削平した際邪魔になる古墳時代河川の流木の頭を燃やしていると考えられるが、この土塚は中世にまで遡る可能性もある。

奈良期にこの面を整地に伴い穴を掘って流木の出ていたのを燃やしたと考えられ、それに伴って不定ピットと位置づけられる。

C264・265・681-O P (第106図 図版144・145)

K14 X H・X Iに位置する。共に柱根が遺存 (C265樹種タブ・323) していた。遺構検出作業時に明確に確認できず下層を掘削中に検出したため、C681以外は充分なデーターが得られなかった。C681-O Pは、掘方の平面が方形で一辺約0.5m深さ約0.6mで、埋土は灰白色粘土質シルトである。

C680-O X (図版55)

中世・奈良の遺構面上のK14 Q H・R H付近に拳大の河原石が集中して出土した。集中の程度は違うが、同様の石はC地区の東側に集中して出土しており、奈良時代の遺構の分布と重複している。出土遺物は須恵器杯、壺がある。

C823-O X (第118図 図版50・142・143)

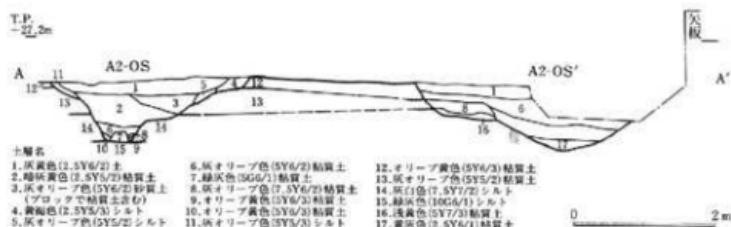
K14 V K・V Lに位置する。明瞭な立ち上がりがなく、地表面上に土器が重なり広がった遺構である。調査区端部で検出され、東側は搅乱され、北側部分はC133-O Sに切られており、南側部分は調査区外で確認できないため、規模は不明確である。

出土遺物は、須恵器 (杯蓋/C226・268・269・288・618、杯A/C265・319・320・294・264・284・267・281・292・321・292、杯B/C262・283・291・182・289・285、杯C/C290、皿A/C270、壺蓋/C273、瓶子/C605)、土師器 (杯A/C313・309・312、皿A/C324・310、皿B/C620)などがある。

## 第5項 鎌倉時代

## A 2-O S (第119図 図版71)

調査区の北東で検出した溝、幅2.83m、深さ0.83mを測り、B地区検出のB・C133-O Sと同規模・同性格の溝で堆積土もよく似た状況であるため、一連の溝になるとされる。平行し、かつ直行する。A382-O Sとも規模が同一のため、一連の溝になる可能性が強い。B・C133-O SとA 2-O Sの距離は各溝の外側で測れば約109m（1町）になる。2段掘りの堆積土は基本的には4層に区分でき更に細分が可能である。溝の底面での形状は特異であり、盛り上がった状況（7層）を呈する。検出した溝の全域で確認で



第119図 A 2-O S 土層断面図

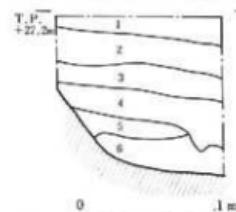
きたため、この盛り上がりは、埋設管を取り囲んでいた粘質土の可能性があり、溝存続期の状況である。それより上層は一気に埋まった可能性がある。この溝は、当地域の条理の坪界に一致する。出土遺物は13世紀前半階の瓦器碗である。

## A 2-O S (第119図 図版71)

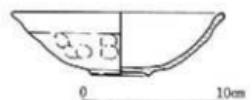
窪み状になっていたのは、北端のみで南は2.35m幅のフラットな堤状遺構の段がつく。その外側は、フラットである。

## A 8-O S (第120図 図版60・178)

調査区の北側の鋼矢板に沿った形で検出した溝で、長さ30m、最大幅3m、深さ0.6mを測る一直線の



第120図 A 8-O S 土層断面図



第121図 A 8-O S (A114)出土遺物 溝である。西は北西に曲がりながら調査区外に伸び

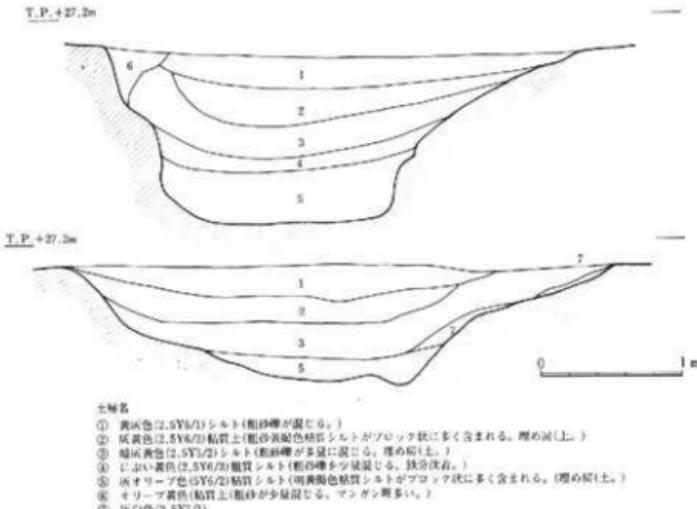
る。堆積土は6層に区分でき、堆積状況からは水の流れは激しくなかったものと考えられる。A47-O S等の建物を取り囲む溝と同方向のため、調査区北側に建物が存在し、その建物を巡る溝と考えられる。出土遺物は13世紀前半の瓦器椀が出土している。A 2-O Sの条理溝に直交する溝でA 2-O Sとは直結しない。又、A 8'-O Sにもつながらない。

#### A 8'-O S (第121図)

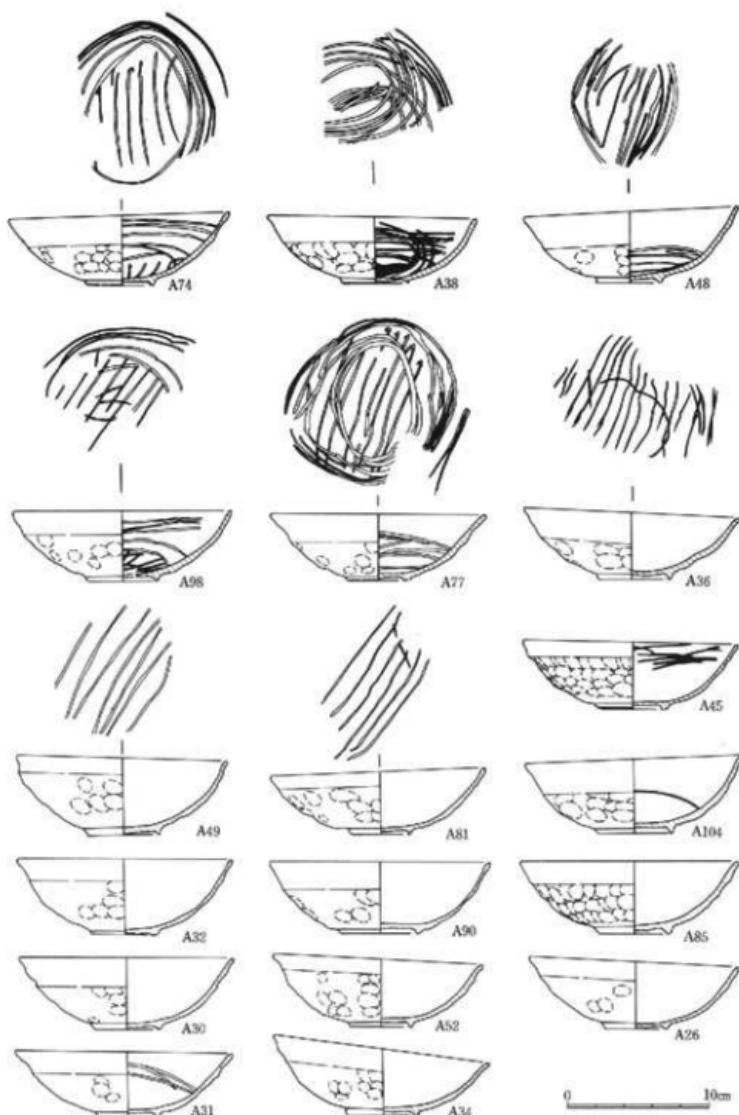
A 8-O Sの西側に位置し西端部では、北側にまがる。溝東端は、他の遺構と重複しており検出が不明瞭であった。残存長14.5m最大幅3.0m深さ0.6mを計る。ベースは、明黄褐色(10YR 6/6)シルト層である。埋土は、A 8'-O Sのそれと同様である。出土遺物は、ないがA 8-O Sと同時期と考えたい。

#### A47-O S (第122図 図版68~70・159~161)

K14P F付近に位置する、逆「コ」字型に曲がる溝である。幅2mで、A192-O Sと共に、建物の区画溝として機能していたと考えている。土層の観察から、ある一時期に埋め戻されたことが判明している。この埋め戻しの際に、大量の土器および若干の瓦・丸石が投棄されている。土器の大半は瓦器椀・瓦器小皿・土師小皿で、これ以外に土師質羽釜・三足釜・東播系櫛鉢が出土している。

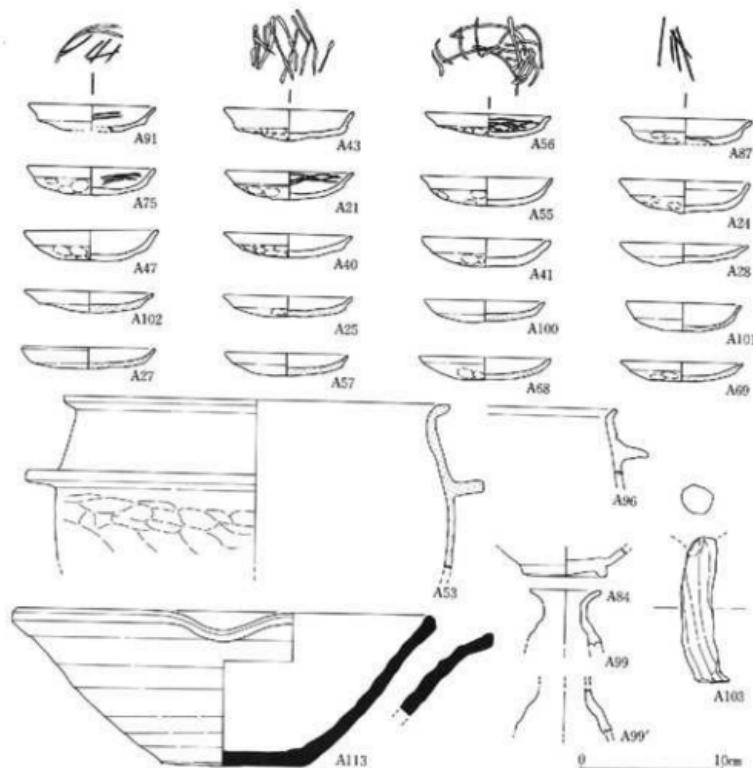


第122図 A47-O Sセクション1、2 土層断面図



第123図 A47-O S出土遺物

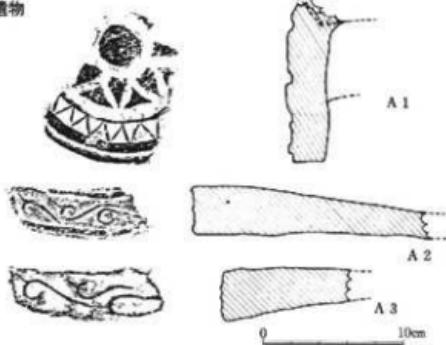
0 10cm



第124図 A47-O S (2) 出土遺物

A192-O S (第126図)

K14QEに位置する溝である。幅2.2m、深さ0.4~0.9mの規模をもつ。西端でA47-O Sにつながっている。A47-O Sとは基本的な埋土は同じで、切り合ひ関係が認められない。このことからA47-O Sと同時期に

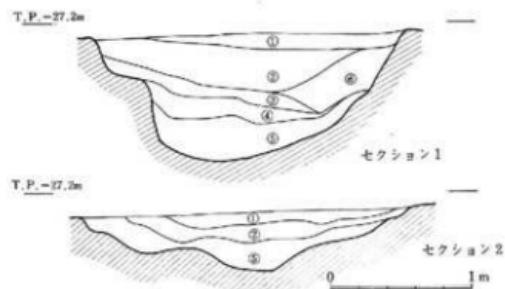


第125図 A47-O S 出土遺物

区画溝として機能し、かつ同時に埋め戻されたと考えてよい。この溝からは若干量の瓦器・小皿・土師小皿が出土している。

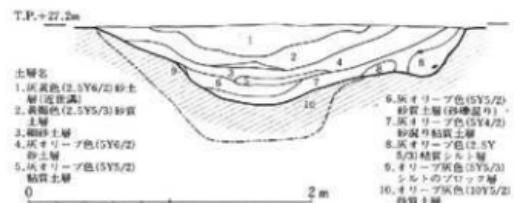
#### B 44-O S (第130図 図版39)

B 1・2・3区のK14FD～1Jで検出された浅い素掘り溝で、併走するB43-O Sを



土層名  
 ① A47-O Sの②に同じ。  
 ② 黄褐色(2.5Y6/2)粘質土(粘沙・粗砂を多少含む。)  
 ③ A47-O Sの③に同じ。  
 ④ A47-O Sの④に同じ。  
 ⑤ A47-O Sの⑤に同じ。  
 ⑥ 区黄色(2.5Y6/2)シート(粗砂・鉄分が沫有。)

第126図 A 192-O Sセクション1、2土層断面図



第127図 B 133-O S 土層断面図

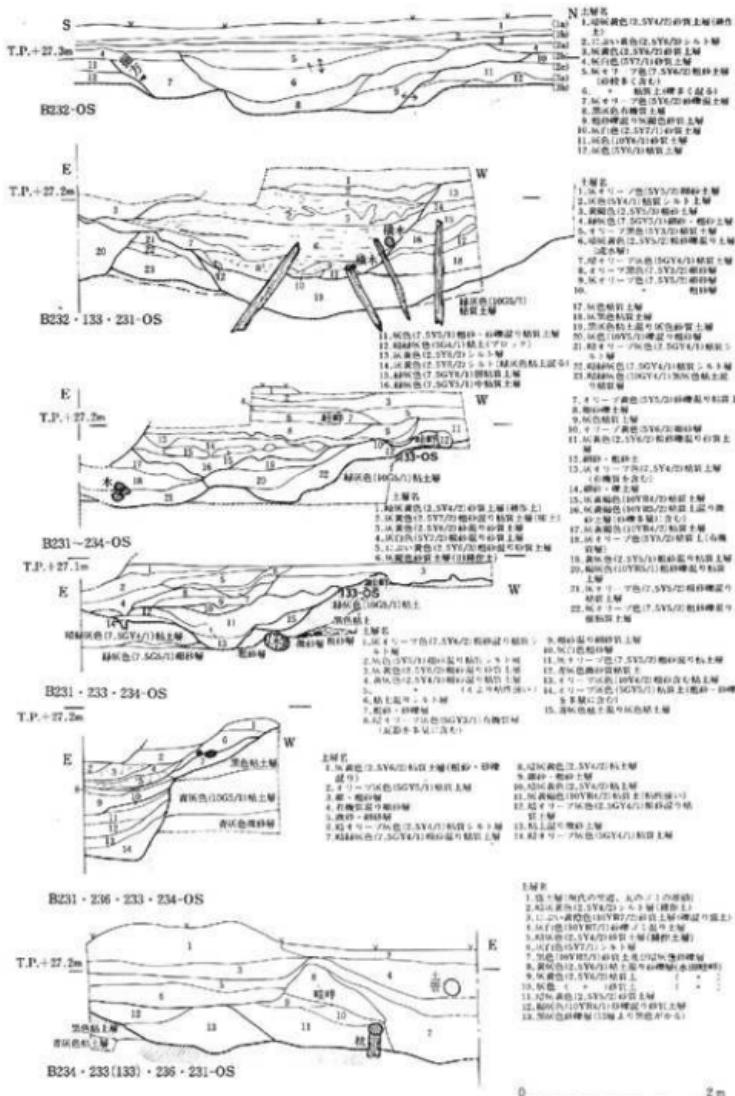
し、K14XD付近で東折し、K14USまでに位置する。この溝は、B地区を南北方向に貫き、C地区に入つてから南東に若干方向を変えた後、同地区中央付近ではほぼ直角に東に曲がり調査区外に延びて行く。深さは約0.6m、幅は約2.1～3.1mの規模である。B地区内では中世末期以降、用水路と重複し、その方向は現在確認できる条里地割にあつていて。C地区内では、直角に曲がる部分に南からこの溝に流れ込む溝C235-O Sが確認できた。B・C133-O SとC235-O Sには切り合い関係が確認されず並存したと考える。埋土は、

切っている。溝の北端はB 1区のB42-O Sに切れられて消失し、南端もA地区が傾斜を増すにつれて不明瞭になる。検出長約5.4m・幅約0.2～0.3m・深さ約8～5cmを測り、溝の掘削はきわめて浅い。断面は浅い弧状を呈し、埋土は黄褐色シルトの単一層である。

遺物は皆無であるが、埋土の状態・B306-O Sとの関係から考えて、鎌倉時代後半期の溝と判断する。

B・C133-O S (第127・128・132～134図 図版77～80・175・176)

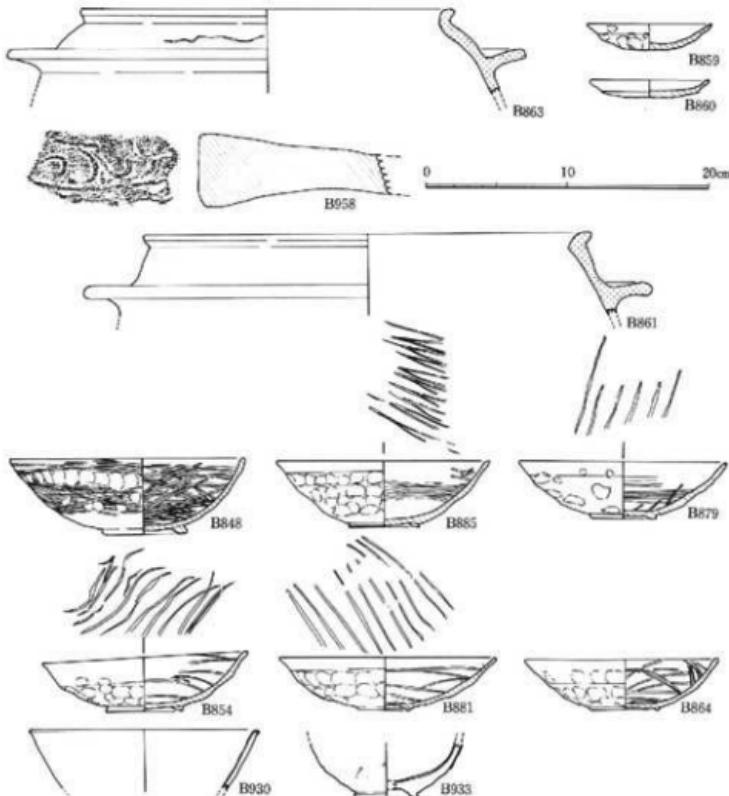
K14SE付近から南下



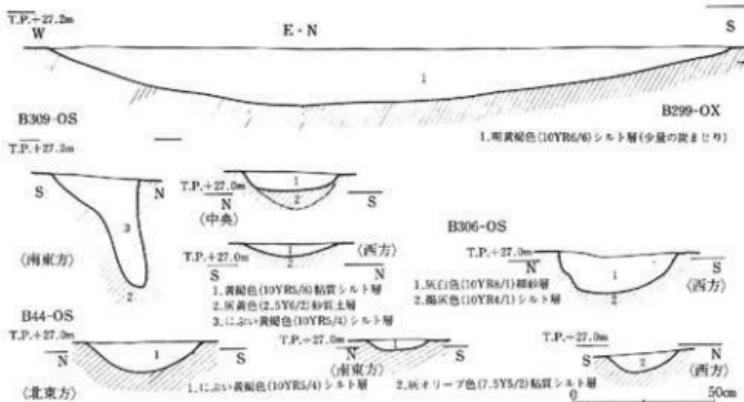
第128図 B232-O X 133・231・233・234・236-O S 土層断面図

C地区では、概ね上層はオリーブ灰色粘土質シルトの混在が見られる灰黄褐色シルト層、下層はその上部に植物遺体を多く含む灰色粗砂層である。この溝の断面図中のスクリーントーン部分は人為的に埋められたと考えている。一方B地区では、砂と粘土がレンズ状に堆積し、自然に埋まった状況を呈している。

出土遺物は、獸骨、土師器（皿/C112・124・123・甕・杯身）、瓦器（C220・126・194・132・128・131・137・129・127・125）、瓦（C206）、須恵器（杯蓋・杯身・高杯・甕・甌・



第129図 B233 (B848・861・854、864・879・881・885) ·  
B234 (B859・860・863・958) · 236-O S (B930・933) 出土遺物



第130図 B299-OX・44・306・309-OS土層断面図

鉢・皿)、黒色土器などがある。

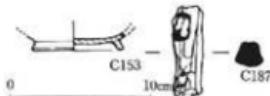
出土した獸骨は10片ほどである。出土層位はほぼ下層に限られており、位置は第132図に示したとおりである。いずれの骨片も全体が青味を帯び酸化が著しい状態で出土した。加工痕(解体痕跡)は観察できなかった。獸骨の種類は以下の通りである。

1・ニホンジカ中手骨。2・ニホンジカ中手骨。3・不明。4・ニホンジカ中足骨。5・ウシ左下頸骨で歯牙は臼歯のみ残存、成獣以上。6~8・不明。9・ウマ上頸骨で骨体の大半を失い、歯牙のみ残存する。左右の臼歯が残存することから頭骨全体があった可能性が高い。成獣。10、11・不明。

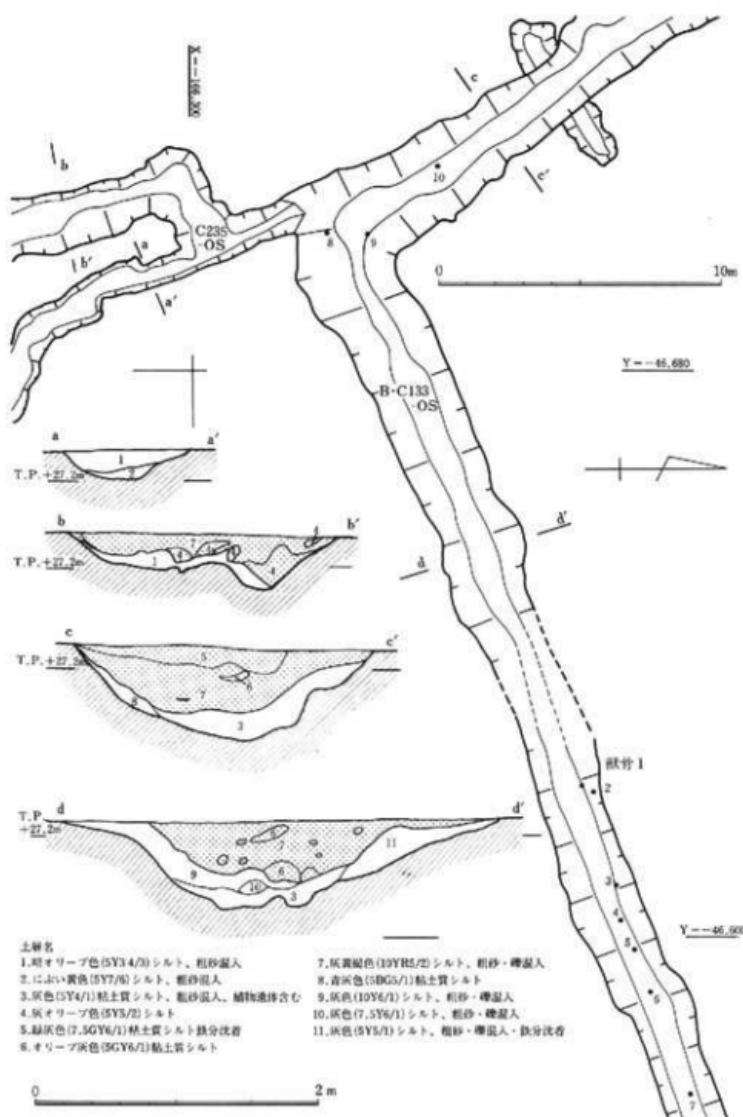
獸骨は、出土直後パラフィンを使用して固めた。その後、骨の保存・観察の必要等からパラフィンを除去し、同時に骨中の水分の蒸発、拡散及び水の表面張力の影響による骨体の崩壊を防ぐため、水分をメチルアルコールで置換した。さらにアクリル系樹脂(商品名: パラロイドB72)20%含有のアセトン液を含浸・塗布して骨を強化し、欠損部の一部をエボキシ系樹脂(商品名: BOND A L L)で充填・補強した。宮崎泰史氏の鑑定による。

B306-OS(第130図 図版38・39・78)

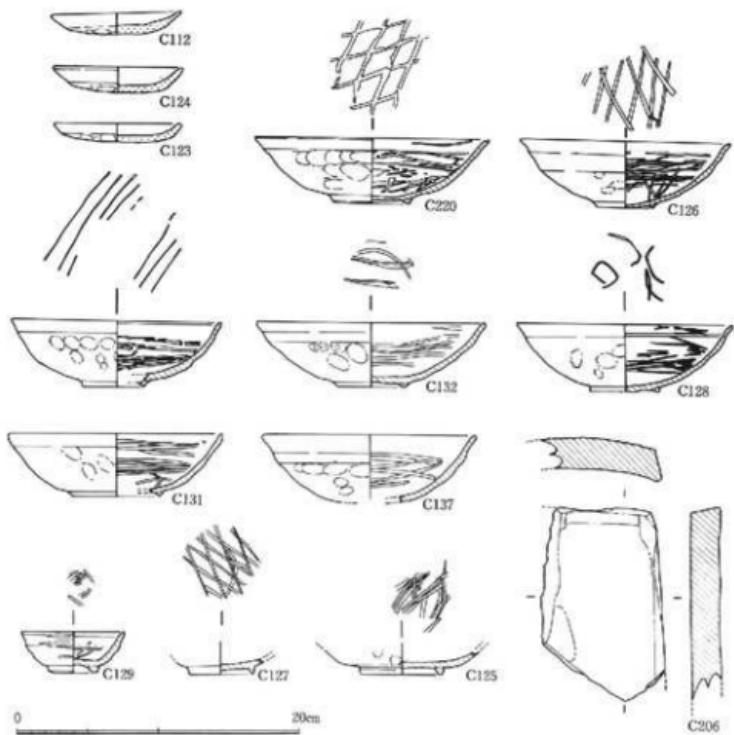
B2区のL14HG~J Eで検出された平面形鉤状を呈する溝である。検出長南北約10m・



第131図 中世溝(C13, 19-OS)出土遺物



第132図 B・C 133-O S断面図及び歴骨出土位置図



第133図 B+C133-O S 出土遺物



第134図 B+C133-O S 暫骨出土状態

東西約6m・幅約0.3mを測り、深さ約5cmの浅いものである。北端はB301-O Sを切ってK14G H付近で消滅する。西は試掘トレンチで破壊を受けており、明らかでない。埋土は灰褐色系の砂質土であった。

この溝を挟んで東西両側に偶蹄類（牛）の足跡が多数検出されたことから、溝の性格として畠敷地廃絶後の耕作地化された際の耕作に伴う畦畔側溝の可能性がある。同様の南北溝としてB4区北端のK14B F付近で検出したB223・B224-O Sと同じ埋土の状況を示す。

#### B309-O S (第130図 図版38・39)

B2・3区のK14J J～JEにかけて検出された検出長17.5m・幅約0.3m・深さ0.4mと浅い溝である。西端はB305-O Sに接するが、両者の前後関係はわからない。溝は途中で二股に分かれ、井戸B333-OWの周りを取り巻いている。さらに井戸の北に至っては広がって浅い落ち込み（B299-O X）となっている。埋土は灰褐色系のシルト質であり、底面には砂が薄く堆積していて、流水があったことを示す。

溝の性格として井戸B333-OWに伴った排水溝の可能性がある。

遺物は、須恵器・土師器・瓦器の細片が極少量出土したに過ぎない。

#### C19-O S (付図1)

K13TRからK19BCにかけて位置する。幅約0.4～1.2m、深さ0.1m前後を測り、埋土は暗オリーブ灰色砂質土である。遺物は須恵器、土師器、黒色土器、瓦器の小片が出土している。

#### C99-O S (付図1)

K13UQからK18AUにかけて位置する。二段に掘られた溝である。検出面での幅は1.1～2m、深さ0.35m前後を測り、二段目は幅0.8m、深さ0.2m前後である。埋土は橙色砂礫を量する。埋土が砂礫であることから、水が流れていたと考えられる。遺物としては須恵器、土師器の小片が出土している。

上の2本の溝は、いずれも現在の水田の境界に沿って延びている。これらは地割りに伴う区画の溝と考えられ、特にC99-O Sは埋土の状況から水路である可能性が考えられる。

**C地区 小溝群 (付図1 図版92)** C地区の西半部全体に広がる。幅0.05～0.4m、深さ0.02～0.1mの小さな溝は、いずれも直線的に延びている。これらは耕作に伴う勘溝と考えられる。遺物は須恵器、土師器、瓦器等の細片が出土しているが、図化に耐えられるものは少ない。

これらのC19・99-O Sと小さな溝とは出土遺物が少なく切り合い関係がないことから、詳細な時期の決定は難しい。現在のところは、区画の溝と鋤溝という一連の造構であり、時期は一部の溝の出土遺物に瓦器があることから、中世以降と捉えている。また、調査区の東半で検出した、B・C133-O S等の造構とも、全く切り合い関係がないことから、これらとも同時に並存していた可能性が高いと考えている。そうなるとB・C133-O Sの中で屋敷が営まれていた時、その周辺で耕作が行われていた状況が復原される。

#### C233-O S（付図1・第135図）

K14Y E付近に位置する。幅0.7~1m、深さ0.3mの規模の溝である。C234・235-O Sに切られる。埋土は灰オリーブ色粘土に粗砂が混入している。

出土遺物は、須恵器（杯身/C133、杯蓋、甕、壺）、土師器（碗、甕）、窯体片などがある。

C234-O S（付図1・第135図）K19A G付近に位置する。幅約1m、深さ約0.2mの規模の溝である。B・C133・C235-O Sに切られる。埋土は緑灰色シルトに粗砂が混入した土である。

出土遺物は、須恵器（杯身/C144・136、甕/C143、杯蓋、壺）土師器（鍋/C140、杯身、甕）瓦器、瓦などがある。

C235-O S（第132・135図）K14Y D付近に位置する。幅0.7~1.5m、深さ約0.3mの規模の溝である。K19D E付近から北に向かった溝は、K19A Dで直角に東折し、この辺りで深さ約0.6mの溜まり状の深みを作った後、K14Y D付近で南北二方向に分かれる。北の溝はB・C133-O Sにつながり、南の溝は、K19B Eで南東に向きを変え、さらにK19C G付近で東折し、B・C133-O Sと平行になりながら調査区外の東に抜けている。埋土は、灰オリーブ色粘土質シルトに粗砂が混入した土である。

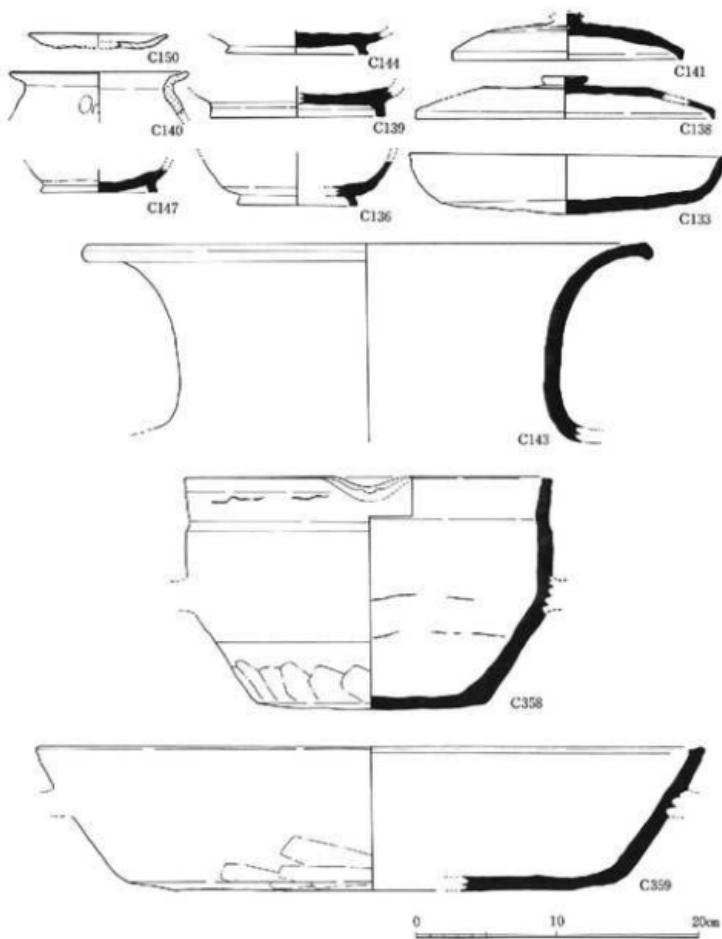
出土遺物は、須恵器（杯蓋/C138、杯身/C139、高杯、甕、壺）、土師器（甕）、瓦器、瓦質甕、白磁、土師質羽釜などがある。

C236-O S（付図1・第135図）K19B H付近に位置する。幅約0.4m、深さ約0.15mの規模の溝である。C235-O Sに切られる。この溝の東側の小溝群は、農耕に関連した、いわゆる鋤溝と呼ばれているものである。埋土は、灰色（5 Y5/1）シルトである。

出土遺物は、須恵器（杯蓋/C141）、土師器がある。

#### C240-O S（第135図）

K14Y C付近に位置する。幅約0.4m、深さ約0.05mの規模の溝である。B・C133-O



第135図 C 233・234・235・236・240・262・328—O S出土遺物

Sに切られる。埋土は、黄灰色（2.5Y6/1）粗砂にシルトが混入した土である。

出土遺物は、瓦器（皿/C150）、須恵器がある。

C262-O S（第135図）

K14WH付近に位置する。幅0.7~1.4m、深さ0.1mの規模の溝である。B・C133-O Sに切られ、C256-O Sを切っている。埋土は、緑灰色（5G5/1）シルトである。

出土遺物は、須恵器（杯身/C147、杯蓋、壺、甕）、土師器がある。

C328-O S（第135図）

K14VE付近に位置する。幅約4m、深さ0mの規模の浅く不整形な溝である。B・C133-O Sに切られる。埋土は、2層に分かれ上層は黄褐色（2.5Y5/3）細砂質土、下層は緑灰色（10G Y6/1）粘土に粗砂が混入している。

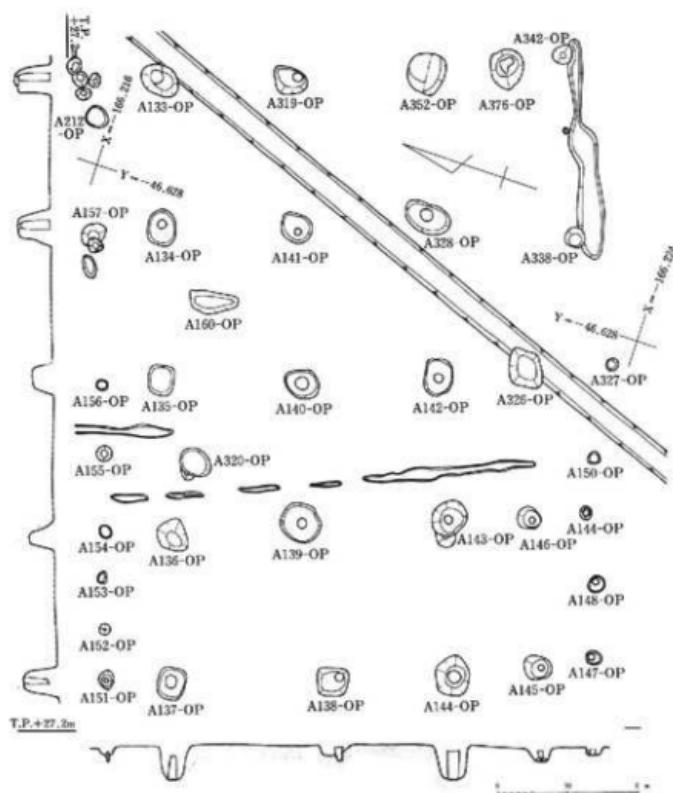
出土遺物は、須恵器（鉢/C358、盤/C359、杯身、杯蓋、壺、壺、甕）、土師器（皿、杯身、甕）がある。

A133-O B（第136図 図版61） K14RF付近に位置する掘立柱建物である。方位はN-21°-Wである。梁行5間（8.6m）×桁行2間（4.0m）の縦柱建物で、庇がつく。特に梁行の南側は二重庇になっている。柱間は、梁行で2.0~2.5m、桁行で1.65~2.1mである。建物に伴うビットは全部で37ヶ所検出した。これらのビットのうち、建物本体を構成するビットは平面形が不整形な円形を呈し、直径が40~50cm、深さ10~50cm、柱痕の直径は10~15cmである。庇を構成するビットの直径は15~30cmである。残存していた柱は樹皮を除去しただけで、面取りなどの加工は施していない。掘方の埋土は明黄褐色シルトブロック混灰黄色シルト（2.5Y6/2）である。この建物は、A47-O SおよびA192-O Sによって他の建物から区画されている。ビットの掘方から土師小皿が出土している。

A129-O P（第137図） K14SCに位置する、直径20cmの円形を呈するビットである。この上面から瓦器小皿一点が据えられた状態で出土した。埋土は明黄褐色シルト（2.5Y6/8）である。

A130-O P（第137図） K14SDに位置する、直径20cmの円形を呈するビットである。この上面からは瓦器小皿二点が据えられた状態で出土した。埋土は灰黄色シルト（2.5Y6/2）である。

A132-O P（第138図 図版72） K14SDに位置する直径20cmの円形を呈するビットである。この上面から瓦器碗二点が出土した。これらの遺物は、据せた状態で重なりあって検出された。遺構の埋土は灰黄色シルト（2.5Y6/2）である。



第136図 A133-OP遺構図

第137図 A129(A23)130  
-OP(A58-70)出土遺物

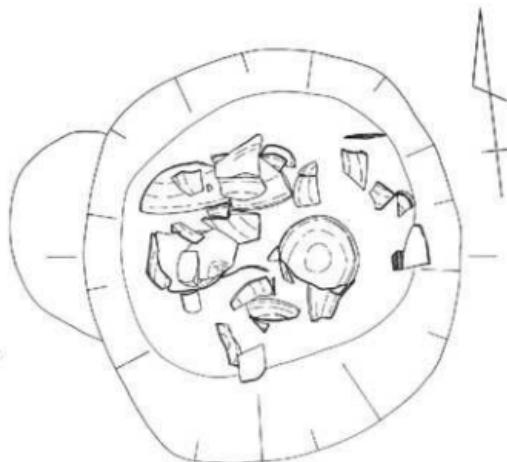
土師小皿が一括投棄された形で出土した。これらの遺物は、あきらかに意識的に埋められたものであり、その所在する位置からみてA133-OBの地鎮に関するものと考えうる。

#### A 157 - O B

(第141図 図版60・61・66)

K14S D付近に位置する掘立柱建物である。方位はN-18°-Wである。梁行2間(3.7m)

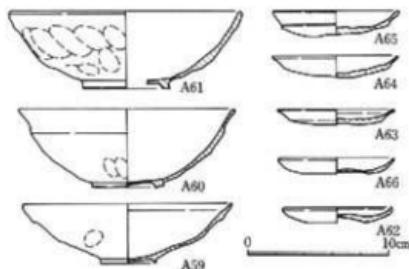
×桁行2間(3.7m)で、柱間はすべて1.85mである。建物に伴うピットは全部で7つ検出した。これらのピットは平面形が不整な円形を呈し、直徑が25~45cm、深さ15~20cm、柱痕の直徑は10cm未満と推定できる。ほとんどのピットに根石が遺存しているが、南西側では根石がピッ



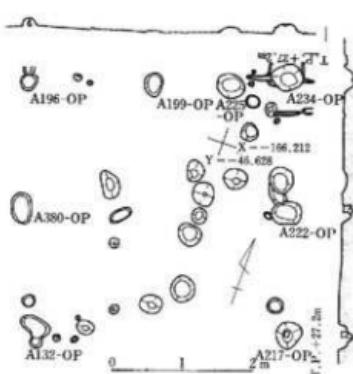
T.P.+27.0m

0 50cm

第139図 A 320-O P 遺物出土状態図



第140図 A 320-O P 出土遺物



第141図 A157-OB遺構図

m) × 衍行2間(3.5m)の総柱で、柱間は梁行2.10~2.25m、衍行1.55~1.7mである。建物に伴うピットは全部で9つ検出した。これらのピットは平面形か円形を呈し、直径が30cm、深さ10~15cm、柱痕の直径は7cmである。堀方の埋土は、灰白色シルト(5Y8/2)である。この建物は、A191-OSを伴う。この溝は建物の梁行方向で幅0.25cm、衍行方向で1.5~2.0m、深さ0.15cmで雨落ち溝と考えている。ピットの堀方から瓦器挽・土師小皿の細片が若干出土している。

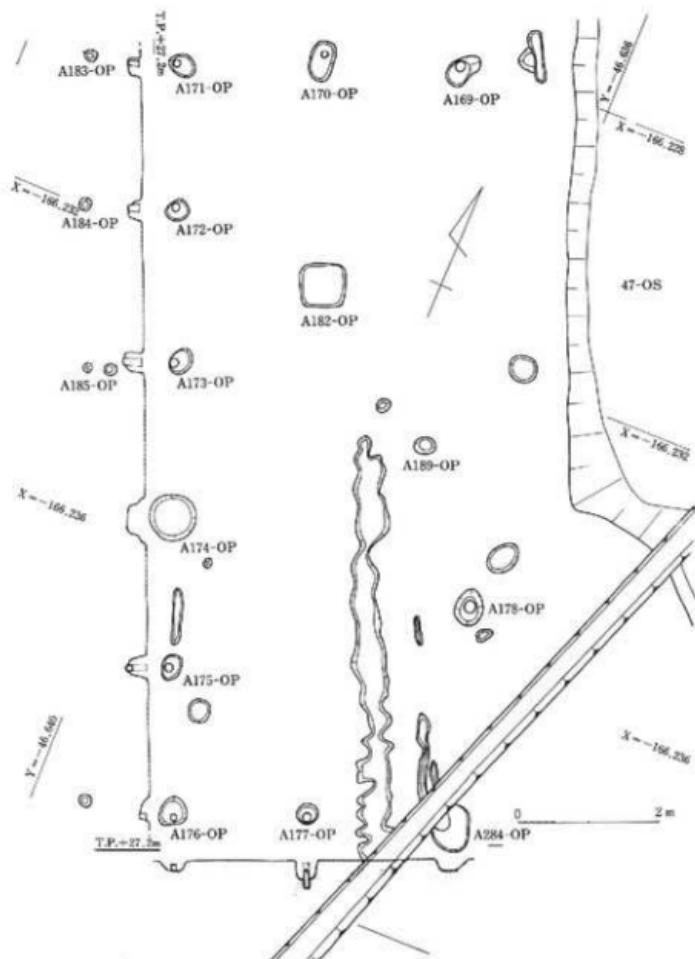
ト上面に露出している。このことから南西側はかなり削平をうけたものと考えられる。堀方の埋土は、明黄褐色シルトブロック混灰黄色シルト(2.5Y6/2)である。この埋土から瓦器挽・土師小皿の細片が若干出土している。

A161-OB(第142図 図版61~65) K14OG付近に位置する総柱の掘立柱建物である。方位はN-22°-Wである。梁行2間(4.4

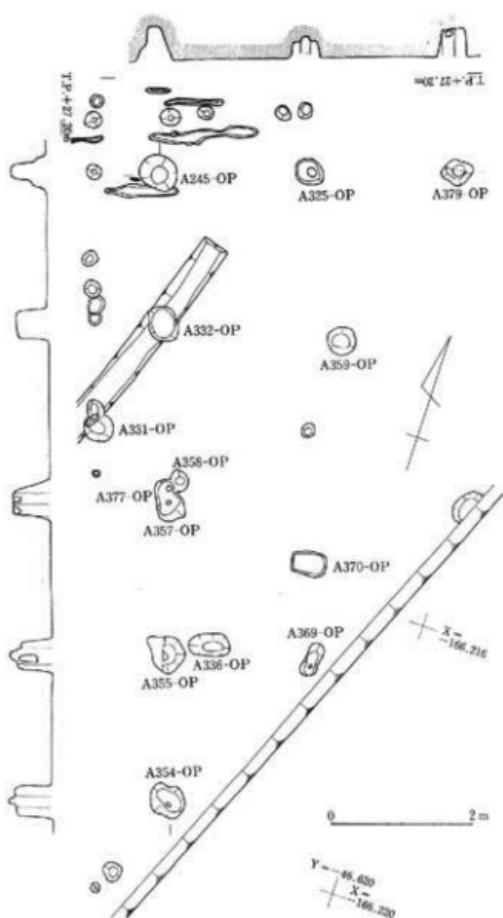


第142図 A161-OB遺構図

A169-O B (第143図 図版61~65) K14 P I付近に位置する掘立柱建物である。方位はN-21°Wである。梁行5間(10.7m)×桁行2間(4.2m)である。建物に伴うピットは全部で11ヶ所検出した。これらのピットは平面形が円形を呈し、直径が30~65cm、深



第143図 A169-O B 造構図



第144図 A245-OB 造構図

さ15~30cm、柱痕の直径は10~15cmである。南西の桁行方向に平行に並ぶピット列は、底の可能性がある。残存していた柱は樹皮を除去しただけで、面取りなどの加工は施していない。堀方の埋土は、暗黄褐色シルトブロック混にぶい黄色粘質シルト(2.5Y6/3)である。この埋土から瓦器碗・瓦器小皿・土師小皿の細片が出土している。

A245-OB (第144図  
図版66) K14TC付近に位置する掘立柱建物である。方位はN-20°-Wである。調査区外にかかっているため、全容は不明である。検出した部分は梁行4間(9.5m)以上×桁行2間(4.2m)

以上で、西側の梁行方向に庇がつく可能性がある。検出した柱穴は10で、直径40~50cm、深さ30~55cm、柱根の直径は5~15cmである。堀方の埋土は明黄褐色シルトブロック混灰黄色シルト(2.5Y6/2)である。この埋土から瓦器碗・土師小皿が出土している。

A地区において検出した上述の遺構は、出土遺物からみて、すべて同時期のものと考え

られる。これらは範跡としてひとつのまとまりを持つもので、さらに調査区の北東方向に広がるものと考えうる。

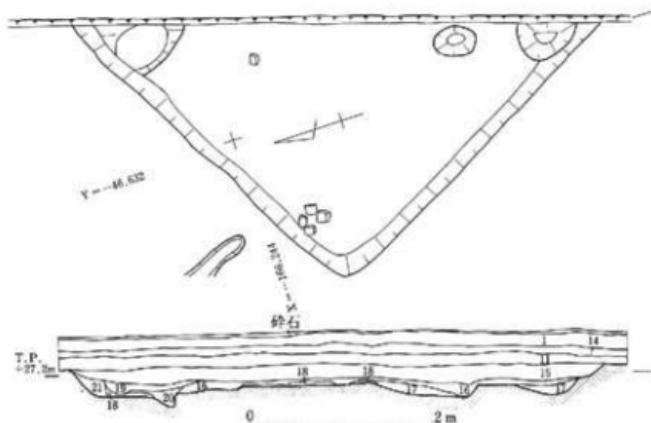
#### A 333-O D (第145図 図版72)

A-III区の東南に位置する。遺構の東半分は調査区外のため不明である。0.2mぐらい握り窪めており、堅穴住居跡と思われる遺構である。底面は所々凹み水平ではない。埋土は基本的に2層に区分できる。底面の堆積は細かくわかれる。出土遺物は13世紀前半代の瓦器碗・土器師皿片が第15層より出土する。

3ヶ所のピットは、柱穴かどうかも不明である。尚、西隅の床からは、拳大の礫が数個検出した。畠の鋤溝と思われるA281-O Sは、A333-O Dの手前できれており、同時併存でありその上に次の段階においてA169-O Bが建てられたと考えられる。

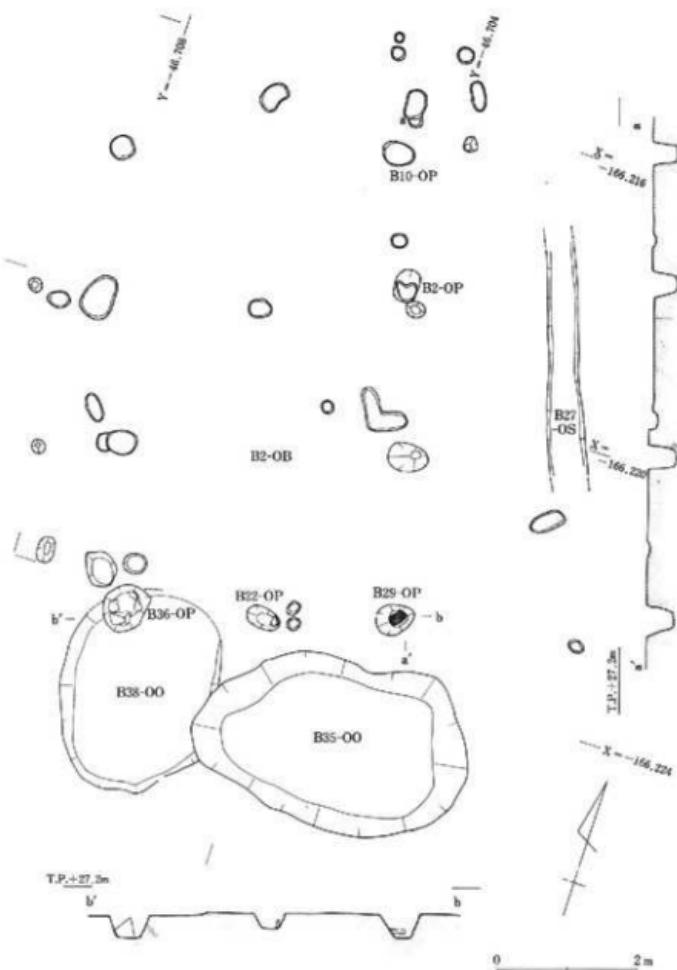
#### B 2-O B (第146・147図 図版74)

調査区の北西で検出した2間×3間以上の掘立柱建物跡である。梁行3.9m、桁行6.6m以上である。柱穴の規則性から考えて桁行は更に延びることが予想され細長い建物になる可能性がある。柱穴の規模も径20~60cm、柱間も1.9m~2.3mとややバラツキがある。柱穴はB-C56-O Rの軟弱な地盤に一部かかるため南側の柱穴は概して大きく、柱穴内には瓦や根石を入れているのがみうけられる。建物の東側には幅0.45m、深さ数cmの溝(B27-O S)が平行して認められることから雨落ち溝と考えられる。近接するB35-O O・



第145図 A 333-O D 遺構図

38-OOについてはB35-OOの埋土内に炭・灰が多く見られ、B38-OOについては床面に多くの集石が認められた。B27-OSとの関係については遺物からみてほぼ同時期の13世紀代と考えられることから、一連の遺構としてとらえる方が妥当かもしれない。



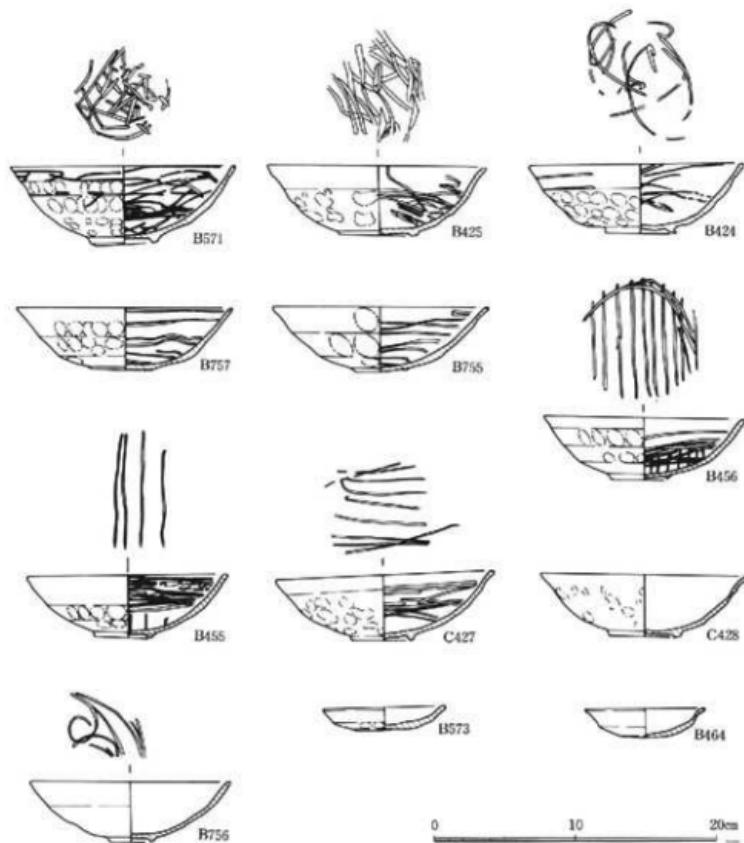
第146図 B2-OB、B35・38-OO遺構図

B45・55-O P (第146図)

建物跡の柱穴としての規則性は不明である。柱穴内には瓦器挽が2個体ずつ認められ、さらにB45-O Pからは鬼瓦(図版163)の一部も出土している。瓦器挽からは13世紀代と考えられる。

B144-O B (第148~153図 図版82~85・169~171)

B地区の鎌倉時代の遺構は、小溝群・溝・井戸・土塁・落込み・建物や櫓に伴う多くの



第147図 B2-O P (B464)・10-O P (B756)・32-O X (B424、425、571、755、757)  
B39-O P (B573)、54-O P (B455、456)、55-O P (C427、428) 出土遺物